

一般社団法人 日本体育学会

体育心理学専門領域会報

第32号（通巻第60号）

体育心理学専門領域

2020年8月発行

体育心理学専門領域会則

- 第1条 本会は、体育心理学専門領域と称する。
- 第2条 本会は、体育・スポーツ心理学研究の発展のため、会員の研究発表の場を提供するとともに他の研究領域と融合した企画を推進し、会員の研究と実践の促進に寄与することを目的とする。
- 第3条 本会は、第2条の目的を達成するために次の事業を行なう。
(1) 研究会の開催
(2) 会報の発行
(3) 会員の研究に資する国内、国外の情報収集と紹介
(4) その他、本会の目的に資する事業
- 第4条 本会の会員は、本会の趣旨に賛同する者で、会費を納入した者とする。
- 第5条 本会に次の役員を置く。
(1) 会長1名
(2) 理事12名
(3) 監事2名
- 第6条 役員を選出は、次の方法で行なう。ただし、末位が同数の場合は抽選とする。
(1) 会長は、会員の単記無記名投票による最多得票者とする。
(2) 理事は、会員の5名連記無記名投票による得票上位者10名とする。
選挙とは別に会員の中から庶務・会計を担当する理事2名を会長が委嘱することができる。
(3) 理事長は、理事の互選によって選出する。
(4) 事務局は理事長および庶務・会計担当理事で構成する。
(5) 監事は、会員の中から会長が委嘱する。
- 第7条 会長および理事の任期は、4月1日より翌々年の3月31日までの2年間とし、2期の重任を限度とする。ただし、理事の2期目に理事長に選出された場合は3期を重任限度とする。
- 第8条 本会に理事会を置き、会長および理事でもって構成する。
- 第9条 理事会には、業務を円滑に遂行するため、次の委員会を置く。
学会大会委員会、企画委員会、広報委員会、庶務・会計委員会
- 第10条 会務を補佐するため、会長の指名により幹事若干名を置くことができる。
- 第11条 本会の会議は、総会および理事会とする。
- 第12条 総会は、次の事項を審議決定する。
(1) 役員を選出
(2) 事業報告および収支決算
(3) 事業計画および収支予算
(4) 会則の改正
(5) その他
- 第13条 総会は年1回、日本体育学会大会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。
- 第14条 本会の経費は、会費、日本体育学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。
- 第15条 本会の会費年度は、4月1日より翌年の3月31日までとする。
- 第16条 本会の住所は事務局と同じとする。事務局の住所は別紙に定める。
- 附則 1. 本会の事務局は、総会の議を経て決定し、移転する。
2. 本会は、日本体育学会の依頼により、日本体育学会関連役員等を選出する。
3. 平成24年4月1日より、日本体育学会が一般社団法人に移行したため法令により、「体育心理学専門分科会」を「体育心理学専門領域」と改称し、本会則の名称を「体育心理学専門領域会則」と改称する。
- この会則は、平成21年8月27日から施行する。
この改正会則は、平成29年9月10日から施行する。

事務局所在地 東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学大学院総合文化研究科 工藤和俊研究室
事務局担当 工藤和俊

体育心理学専門領域の役員

任期：2019年4月1日～2021年3月31日

会長：山本裕二

理事長：工藤和俊

理事：学会大会委員会 ○関矢寛史、荒木香織、高井秀明

企画委員会 ○杉山佳生、三村 寛、森 司朗

広報委員会 ○土屋裕睦、平山浩輔、深見将志

庶務・会計委員会 國部雅大（庶務担当）、奥村基生（会計担当）

○委員長

監事：木島章文、田中美史

幹事：鈴木啓央

一般社団法人 日本体育学会

体育心理学専門領域会報

第 32 号 (通巻第 60 号)

体育心理学専門領域

2020 年 8 月発行

巻頭言

体育心理学専門領域会長 山本裕二

今年は新型コロナウイルスの流行によって、外出自粛やリモートワークを初めて経験しました。大学の授業や会議もオンライン授業やオンライン会議となり、これまで対面で行われていたさまざまなことがオンラインで行われるようになりました。これは、日本国内だけでなく、世界各地でも同様のことが起こっており、これほどまでにあらゆる人たちが影響を受けた出来事は100年前のスペインかぜ以来だと思えます。と言いましても、当然私自身も初めての体験です。この後に、第二波、第三波が来るのかどうかわかりませんが、間違いなくさまざまな面で新しい対人様式が拡大するでしょう。おそらく10年後には到来していたと予想される新しい対人様式が、一気に前倒しされた感がします。オンライン会議では旅費や移動時間がかからずに、いつでも会議ができることは有益だと感じる方も多いでしょう。半面、いわゆるアフターファイブのコミュニケーションに憧れます。

今年度は体育学会が開催されず、その代わりに2020 横浜スポーツ学術会議 (Yokohama2020) という国際会議が9月に開催されることになっていましたが、こちらもオンライン学会になりました。そして、来年度は筑波大学で体育学会が開催される予定です。そして、6月27日に開催された日本体育学会定時社員総会では、応用(領域横断)研究部会の設置が承認されました。この部会には、スポーツ文化、学校保健体育、競技スポーツ、生涯スポーツ、健康福祉の5つの研究部会が設けられ、主に学会大会の企画を中心的に担っていくものと思われま。来年度の学会では、これまでの学会と異なり、シンポジウム等は各専門領域単位ではなく、これらのテーマごとに領域横断的なシンポジウムや研究発表が開催されるはず。そのために、当然体育心理学専門領域からも各研究部会に委員を出すことになります。こうした流れ自体は昨年の巻頭言でもご紹

介しましたが、研究方法論から現象による分類への移行、言いかえればトップダウンからボトムアップへの移行と考えられます。当然、どちらのアプローチも重要なのですが、学会大会を契機に体育・スポーツ・健康に関する学問領域に横串を入れようというものだと思います。学問領域が先鋭化するのとは良いことなのですが、そこで縮小再生産が行われてはいけません。拡大再生産を行うためには常に広い視野で現象を見つめる眼が必要だと考えます。

今回のコロナ禍によって、これまでわれわれが進んできた道を再度確認できる機会となったのではないのでしょうか。眼前にある現象(研究対象だけでなく)をしっかりと見つめることと、はるか先を見通そうとすることは決して相反することではないと思います。ネガティブ・ケイパビリティという言葉があります。日本語にはなりがたいのですが、「安易に答えを求めず悩み続ける力」と私は解釈しています。このコロナ禍に対しても、研究に対しても、大切なことは現象から目をそらさず、自らが考え続けることだと思います。思考停止にだけは陥らないことです。

最後に、今年度は役員選挙がありました。これも初めてオンライン選挙で実施させていただきましたが、このオンライン選挙も含め、これまで2期4年間にわたり、事務局として本専門領域の運営にご尽力いただいた工藤和俊理事長、奥村基生理事、國部雅大理事、及び鈴木啓史幹事にお礼申し上げます。大変ありがとうございました。

体育心理学専門領域会報 第 32 号
目 次

巻頭言	i
目次	ii
I. 日本体育学会第 70 回大会関連	
1. キーノートレクチャー	
題 名：中途障害に伴う自己の喪失と再構築のストーリー—パラアスリートの語りから—	
司 会：関矢寛史（広島大学）	1
演 者：内田若希（九州大学）	2
傍聴記：奥野真由（久留米大学）	3
2. シンポジウム	
題 名：メンタルトレーニング指導の現場：指導者や科学スタッフとの連携	
司 会：高井秀明（日本体育大学）	4
演 者：荒木香織（園田学園女子大学）	5
組織を鍛える：スポーツメンタルトレーニング指導士の役割	
演 者：橋口泰一（日本大学）	6
パラアスリートにおける心理サポート	
演 者：西山哲成（日本体育大学）	7
指導者の立場からみえる心理サポート	
傍聴記：實宝希祥（国立スポーツ科学センター）	8
3. 特別レクチャー	
題 名：Climbing to yourself: A New Perspective on Motor Heuristics and Embodied Choices	
司 会：工藤和俊（東京大学）	10
演 者：Markus RAAB (German Sport University Cologne; London South Bank University, UK)	12
傍聴記：高御堂良太（名古屋大学大学院）	13
4. ランチョンセミナー 1	
題 名：体育・スポーツ心理学研究領域のこれから	
司 会：山本裕二（名古屋大学、体育心理学専門領域会長）	14
傍聴記：中本浩揮（鹿屋体育大学）	15
5. ランチョンセミナー 2	
題 名：日独体育心理学交流	
司 会：國部雅大（筑波大学）	16

演者：田中美吏（武庫川女子大学）	17
Past and present research analyzing motor performance under pressure	
演者：樋口貴広（首都大学東京）	18
Adaptive locomotor adjustments: understanding based on the concept of “motor heuristics” and “embodied cognition”	
傍聴記：横山慶子（名古屋大学）	19
6. 口頭発表（座長報告）	
座長：三村 覚（大阪産業大学）	20
座長：村山孝之（金沢大学）	21
7. ポスター発表記（演者報告）	
発表者1：相川 聖（日本体育大学大学院）	22
発表者2：三澤孝康（山梨学院大学）	23
8. 大会参加記	
大会参加記：筒井和詩（名古屋大学）	24
大会参加記：山田弥生子（大阪体育大学大学院）	25
9. 学会発表支援金採択者 大会参加記	
日本体育学会に参加して：霜鳥駿太（筑波大学大学院）	26
日本体育学会に参加して：松岡悠太（法政大学大学院）	27
日本体育学会に参加して：黒田貴稔（びわこ成蹊スポーツ大学大学院）	28
日本体育学会に参加して：藤本雄太（びわこ成蹊スポーツ大学大学院）	29
日本体育学会に参加して：足立廉太郎（広島大学大学院）	30
日本体育学会に参加して：柴崎雛子（筑波大学大学院）	31
日本体育学会に参加して：板谷 隼（筑波大学大学院）	32
II. 研究会の活動報告	
スポーツ社会心理学研究会：内田若希（九州大学）	33
メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会：高妻容一（東海大学）	34
運動学習研究会：鈴木啓央（龍谷大学）	35
臨床スポーツ心理学研究会：中込四郎（国士舘大学）	36
スポーツ動機づけ研究会：北村勝朗（日本大学）	37
III. 研究室紹介	
福山平成大学福祉健康学部健康スポーツ科学科 スポーツ心理学研究室：	
藤本太陽（福山平成大学）	38
國學院大學人間開発学部健康体育学科 伊藤研究室：	
伊藤英之（國學院大學）	41

IV. 学位論文紹介	
伊藤豊彦（久留米大学）	44
筒井和詩（名古屋大学）	46
向井香瑛（早稲田大学）	48
大木雄太（筑波大学）	50
菊政俊平（金沢学院大学）	52
V. 海外情報	
渋谷崇行（桐蔭横浜大学）	54
VI. 事務局報告	
2019年度体育心理学専門領域 第2回理事会 議事録	56
2019年度体育心理学専門領域 総会 議事録	59
2020年度（令和2年度）体育心理学専門領域 第1回理事会 議事録	62
資料1 令和元年度決算報告書	65
資料2 令和2年（2020年）度補正予算案	66
編集後記	

I. 日本体育学会 第70回大会関連

司会報告

関矢寛史（広島大学）

大会2日目である9月11日の9時～10時に慶応義塾大学日吉キャンパスの第4校舎B棟J21にてキーノートレクチャーを開催した。講師として九州大学の内田若希先生をお迎えし、「中途障害に伴う自己の喪失と再構築のストーリー—パラアスリートの語りから—」というテーマでご講演いただいた。

体育心理学専門領域学会大会委員会では、これまで体育学会では体育授業に関するテーマが優先され、アスリートへの心理サポートに関するテーマがあまり取り上げられなかったことから、日本スポーツ心理学会認定スポーツメンタルトレーニング上級指導士として、2006年より日本パラリンピック委員会医・科学・情報サポートの心理スタッフ、2011年より日本障がい者スポーツ協会科学委員会委員として、パラアスリートの心理サポート活動を精力的に行ってこられた内田先生にご登壇をお願いし、理事会の議を経て今回の開催に至った。朝早い時間帯にも関わらず体育心理学専門領域はもとより、多領域からも多くの方々に参加していただくことができた。

ご講演では、内田先生にこの道に進まれた経緯などの自己紹介や研究のターニングポイントとなった二冊の本との出会いなどもご紹介いただくことができた。そしてパラアスリートのライフストーリーとして、喪失のストーリーと再構築のストーリーに分けて大変分かりやすくお話いただくことができた。

内田先生には、2016年度の日本スポーツメンタルトレーニング指導士会中国四国支部研修会でも「パラスポーツにおける心理サポート再考—障害とは何か—」というテーマでご講演いただき、その時大変勉強になったが、今回はパラアスリートの具体的な喪失と再構築のストーリーをナラティブ・アプローチによる質的研究に基づいてご紹介いただくことができた。また、研究で明らかになったことだけでなく、質的研究の分析方法やまとめ方についても大変勉強になった。

内田先生は2017年に金子書房から「自己の可能性を拓く心理学—パラアスリートのライフストーリー」を出版されたが、今回のお話はそれに記された内容のごく一部であったと思われる。しかし、楽しそうにお話しされる内田先生のご講演を直接聴くことによって、本を読んで考えさせられたことをより感情の伴った記憶として留めることができた。

特に印象に残った内容は、まず障害者と健常者という二元論的な分極思考に陥ることの危険性があること、そしてさまざまな喪失体験として、加齢に伴う身体機能の喪失、死別や離別などの重要な他者との関係性の喪失、受験失敗・失業などのキャリアの喪失など誰もが体験し得ることは多く、パラアスリートの事例をすべての人に当てはめて考えることが有用となることであった。また、真の障害とは、自己の可能性に挑戦することを諦めることであり、スポーツの世界に限定される話ではないと感じた。

さらに、喪失体験を受容することが常に良い状態や目指すべき状態ではなく、葛藤しながらもどのように引き受けるか（ネガティブ・ケイバビリティ）という考え方があることを学んだ。自分の研究に当てはめると、プレッシャー下でのパフォーマンス低下や競技での敗北を防ぐことが研究や心理サポート実践の目的になりがちであるが、それらの体験にどのような意味を見出すかという視点も重要であると考えさせられる機会となった。内田先生に感謝の意を表したい。



司会・関矢寛史氏（右）と演者・内田若希氏

演者報告「中途障害に伴う自己の喪失と再構築のストーリー—パラアスリートの語りから—」

内田若希（九州大学）

日本体育学会第70回大会において、「中途障害に伴う自己の喪失と再構築のストーリー—パラアスリートの語りから—」というテーマで、キーノートレクチャーを担当させていただきました。私は15年以上にわたり、「中途障害」「自己」「喪失と再構築」をキーワードに研究・実践に取り組んできました。その中で、私が経験してきたこと、考えてきたことを中心に、お話しさせていただきました。

これまでの研究で、中途身体障害を負うことは、人生の半ばで身体機能や身体部位を喪失するだけでなく、生活上の変化を迫られる経験となること、その一方で、スポーツ場面で体験される意味のある出来事を通して、受障による喪失感からの脱却や生きる意味の再定義がなされることを提示してきました。私の研究フィールドはパラスポーツ領域です。で、（ある意味で当然のごとく）中途障害を経験した方を対象としてきました。しかし、ある2冊の書籍との出会いによって、私の研究の視座は大きな転換期を迎えることとなりました。

そのターニングポイントとなった2冊をキーノートレクチャーでもご紹介しましたが、改めてここで取り上げさせていただきます。1冊目は、『LIFE after LOSS: A Practical Guide to Renewing Your Life after Experiencing Major Loss (Deits, B., 1988)』という書籍です。この本は、グリーフケアを扱った実践的専門書となっています。この本にあった一節“anyone who has suffered a significant life change”に、私は非常に考えさせられました。中途障害のような非日常的な経験のみならず、受験失敗・失業などのキャリアの喪失、死別や離別などの重要な他者との関係性の喪失、加齢に伴う身体機能や役割の緩やかな喪失など、日常を喪失するような、不本意で思いがけない出来事の体験は、誰にでも起こりうるのではないかと気づかされたのです。そして、2冊目にご紹介したのが『それでも僕の人生は希望でいっ

ぱい（ブイチチ 渡邊訳、2010）』です。「本当の障害」の概念を中心に読み進めるにつれ、障害の社会モデルは誰にでも当てはまるのではないかと考えたのです。この2冊の書籍との出会いによって、私は障害者スポーツ科学の枠組みから脱却し、パラアスリートがさまざまな体験を積み重ねて自己変容していく姿から、障害の有無に関わらず、多くの人に有用な生き方の指針を提示したいと考えるようになりました。

このような想いのもとですすめたライフストーリー研究の成果の一部を、今回のキーノートレクチャーにおいて発表させていただきました。とくに、パラアスリートの「中途障害の受障体験」と「スポーツでの意味のある体験」という2つの転機の語りを通して、「喪失」と「再構築」の意味を提示させていただきました。また、パラアスリートの回復の語りにも着目するのではなく、負の部分のもつ独自の価値や、苦悩をどう引き受けるのかといった部分にも眼差しを向けて研究を進めました。そこから、喪失体験を「成長のきっかけとなったポジティブなもの」「克服した過去のもの」と単純にみなすのではなく、その痛みや苦しみと寄り添い、ともに生きていく現実があることを提示しました。これらの喪失とともにどう生きるのかを支援することを、今後も考え続けたいと思っています。

最後になりますが、司会をご担当いただいた関矢寛史先生、ならびに会場にお越しくくださった皆様に、この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。



演者：内田若希氏

傍聴記

奥野真由（久留米大学）

内田若希先生(九州大学)のキーノートレクチャー「中途障害に伴う自己の喪失と再構築のストーリー—パラアスリートの語りから—」を拝聴しました。

お話しは、まず、現在のご研究に取り組むきっかけとなった、ご自身の体験の紹介から始まりました。疾病や障害など身体に制限があると、私たちはその制限に目を向けてしまいがちです。しかし、「その人の持つ能力に目を向けることができれば、そしてその能力を支援することができれば何でもできるのに」とおっしゃる内田先生のお話しから、相手が困らないように何かをしてあげることが支援の全てではなく、相手の可能性を信じ、その能力をいかす支援のあり方の大切さを感じました。

次に、内田先生のご研究のターニングポイントが、書籍との出会いに沿って紹介されました。そこで、「本人が主体的に（喪失体験によって生じた）その負の部分とどう向き合い、どう付き合っていくのかを、今までないがしろにしてきたのではないか」と問題提起があり、障害をもつ自己を“受容”し“成長”することをゴールとする捉え方に、疑問を投げかけられました。

そして、メインテーマであるパラアスリートのライフストーリーに関するご研究が紹介されました。今回のキーノートレクチャーでは、ご研究の中から、①喪失のストーリー、②再構築のストーリーが、中途障害のアスリートの語りに沿って提示されました。①は、当たり前にあるはずだった日常や未来を喪失し、自分自身の中に不在であった“障害者”として生きる自己への葛藤についてのお話しでした。②では、スポーツの継続を通して、“自己や喪失体験の意味づけが変化すること”と、“障害に対するアンビバレントな感情を抱きながらも、それと寄り添い生きていく自己”とが混在している様子が、図として提示されました。

1時間のレクチャーの中で、途中何度か「こんな

ことを考えたことはありますか？」と、内田先生がフロアの私たちに問いかける場面がありました。それは、“今の自分自身や生活がこれからも続いていくと疑わずに過ごしていること”や、“障害者という形容詞を用いることで、自分自身と分離してその存在を捉えていること（障害は自分自身の中には不在であること）”について、「そんな部分、自分自身の中にありませんか？」という問いかけのように感じられました。自分自身の中に“不在であるもの”の存在にころを馳せることの大切さに、内田先生からの問いかけを受けて気付いた場面でした。

私は、スポーツメンタルトレーニング指導士として、アスリートとお会いする機会があり、中には、怪我での競技離脱や、指導者・ベア・所属先などの変更といった、喪失体験をきっかけに来談するアスリートもいらっしゃいます。アスリートが喪失に直面した際、その喪失体験と向き合うことの重要性をないがしろにはいけない、ということの内田先生のお話しを通じて再確認することができました。そして、アスリートがその喪失体験を自分自身の一部とし、喪失と共にこれから生きていく過程に寄り添うことも、心理担当者としての重要な役割ではないかと、感じました。

私にとって今回のキーノートレクチャーは、アスリートと関わる自分自身について改めて考える機会となりました。丁寧なご研究をもとに、貴重な提言を頂いた内田先生、企画者運営に関わった先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

司会報告「メンタルトレーニング指導の現場：指導者や科学スタッフとの連携」

高井秀明（日本体育大学）

近年、アスリートや指導者に心理サポートとして提供される、メンタルトレーニングに関する興味・関心は高まっている。しかし、そこでは何が行われているのか、その効果は客観的に評価できるのか、心理サポートスタッフとは共通言語で議論できない、といった話を耳にすることがある。効果的な心理サポートをアスリートや指導者に提供するには、1 on 1 の関係だけではなく、それを取り巻く人的な環境についても“うまく”調整することが求められるだろう。

そこで、2019年9月11日（水）に開催された体育心理学専門領域企画シンポジウムにおいては、大会テーマである「学問とは実学、すなわちサイヤンス」をコンセプトとし、ハイパフォーマンスを追求するアスリートはもちろんのこと、指導者や他領域の科学スタッフと心理サポートスタッフはどのように連携することが望まれるのかについて議論された。特に、2019年の9月20日からはラグビーのワールドカップ、2020年の7月24日からはオリンピック、8月25日からはパラリンピックが自国開催されるため、その点を考慮し、シンポジストは構成されている。

シンポジストの荒木香織先生からは「組織を鍛える：スポーツメンタルトレーニング指導士の役割」という題目で、スポーツメンタルトレーニング指導士として提供される実践活動と理論的背景について報告され、スポーツ心理学者として研究エビデンスを有効活用し、心理サポートに携わる重要性が訴えられた。また、選手の心理的課題に対処するには、心理サポートスタッフだけでなく、他の指導スタッフにも連携してもらおうと効果があり、ここではシンポジウムの参加者にアプローチを具体的にイメージしてもらおうため、ラグビーの日本代表選手の心理サポートに関する事例が紹介された。

次に、橋口泰一先生からは「パラアスリートにおける心理サポート」という題目で、わが国における

パラアスリートの心理サポートを含めた医科学情報サポート体制の変化について報告され、2020年に開催される東京パラリンピックへの組織的な取り組みを熟考する機会となった。また、医科学情報サポート事業では、心理サポートをはじめとした6領域のサポートが選手や指導者に提供されており、現在は日本パラリンピック委員会や日本スポーツ振興センター、国立スポーツ科学センターなどが協力して組織的な連携を図り、東京パラリンピックに向けて準備していることが明らかとなった。

そして、西山哲成先生からは「指導者の立場からみえる心理サポート」という題目で、ハイパフォーマンスを追求する自転車競技の指導者として心理サポートスタッフに求める連携のあり方について話題提供された。さらに、西山哲成先生は自転車競技の選手経験がなく、生理学やバイオメカニクスを専門領域とする研究者であり、それに関係する手法を巧みに利用して選手の競技力向上に携わっていることが報告され、その内容はスポーツ科学の可能性を実感する機会となった。

最後に、西山哲成先生が述べた「専門的な生理学の知識を持たない指導者が、具体的な生理サポートをオーダーすることは困難であるのと同様に、心理サポートは大切であると思いつながらも、その専門家に何を頼むべきなのか、わからない」というコメントは、考え深い。当たり前のことかもしれないが、体育・スポーツ心理学の研究者がアスリートや指導者、他領域の研究者と“うまく”連携するには、この点を直視して対策を講じる必要があるだろう。



司会・高井秀明氏（左）と演者の先生方

演者報告「組織を鍛える：スポーツメンタルトレーニング指導士の役割」

荒木香織（園田学園女子大学）

指導者は、選手やチームの育成及び、パフォーマンス発揮に関してその多くの役割を果たしてきた。しかし、スポーツ科学領域の発展と同時に、その重要性が理解されつつあるため、指導者の役割を多様な専門家が分担する傾向にある。指導者、そして他領域の科学スタッフと連携しながら、選手やチームにとって最良の環境を提供することはスポーツメンタルトレーニング（SMT）指導士に求められる重要な役割の1つとなっている。

SMT指導士が効果的なプログラムを構築するには、①指導者や選手からの要望に耳を傾ける、②指導者と選手を理解する、③選手を取り巻く環境を理解する、④適切な理論及び最新の研究成果を理解することが必須である。本シンポジウムでは、15人制ラグビー男子日本代表チームのメンタルコーチを務めた際に実施した、組織を鍛えるためのプログラムの一端を紹介した。プログラムの基盤となった組織文化モデルを構築した Denison & Mishra (1995) は、組織文化の強化には4つの要素を考慮する必要があるとしている。日本代表チームの取り組みにおいて参考にした内容は、①組織にとって意義のある長期的な方向性を明確に示す（ミッション）、②文化の基盤となる価値とシステムを明確に示すとともに、重要課題の解決方法や結果について合意を得ながら目標達成へ導く（一貫性）、③ひとの資質、オーナーシップ、コミットメントを構築するとともに、組織に属するすべての個人が共有する目標に取り組むことへの価値を見出す（関連性）、④組織の知識と能力の向上に取り組む、変化を創造する（適応性）ことであった。これらを満たし組織力を高めることで、組織の求める結果を得ることや、組織に属するメンバーの満足感に繋がるとされているが、まさにその通りの結果にたどり着くことができた。

理論を基盤としたコンサルテーションを効果的に展開していく上で、スポーツ心理学の専門家として

のコンピテンシーの向上が必要不可欠である。専門家のコンピテンシーは、①専門性 ②関係性 ③科学 ④実践 ⑤教育 ⑥運営の6つのカテゴリーと16のサブカテゴリーに分類することができる（APA, 2012; 石原ら, 2017; 2018）。選手や指導者に加え、多様な専門家と協働する際には、特に⑥運営のカテゴリーに含まれる「学際的な運営」のコンピテンシーが必要となる。具体的には、①関連領域（運動生理学、バイオメカニクス、スポーツ傷害、栄養学、発育発達、スポーツ社会学、スポーツ文化等）の主な内容及び概念に関する知識を持ち合わせることで、②コーチ、S&C、フィジカルトレーナー、メディカルドクター、分析、通訳、広報、ジェネラル・マネージャー、エージェントを含む複数領域の専門家の仕事を理解し、情報交換を行い、協働することが挙げられる。

SMT指導士として組織を鍛えるためには、適切な理論を基盤としてプログラムを構築、遂行していくこと、そしてその過程に適切なコンピテンシーを持ち合わせることが求められる。しかしプログラムそのものや遂行の際に必要な方略や手法は、選手、指導者、組織の特徴、そしてそれを取り巻く環境など、多様な要素がアートのように入り混じることにより、その独自性を放つ。SMT指導士の役割は、指導者や多様な専門家とともに、選手へのエンパワーメントを目標に、組織の変化創造の手助けを遂行することであると考えられる。



演者：荒木香織氏

演者報告「パラアスリートにおける心理サポート」

橋口泰一（日本大学）

本シンポジウムでは、パラアスリートをサポートする立場から、その歴史的背景やサポートについて発表させていただきました。

リハビリテーションの一環として開始されたパラスポーツは、国際競技大会が行われるようになり、定められた標準記録の突破や、世界ランキングの上位にランクインしなければパラリンピックには参加できないといった「競技スポーツ」として成熟している。わが国では、特に長野 1998 パラリンピックを契機として大きく変わった。プロとしての活躍や競技志向の高い選手が輩出され、東京 2020 パラリンピックの開催が決定したことを受け、強化費や補助金も含め、強化体制や組織など多くの場面で変化がみられる。

わが国のパラアスリートへの科学支援は、アテネ 2004 パラリンピック後から実施され、2006 年より日本パラリンピック委員会（JPC）がその必要性を打ち出した。この科学支援事業（当時）は、心理と栄養のサポートから始まり、現在は医・科学・情報サポート事業と名称を変え、心理を含む 6 領域にてトータルサポート及び研修が行われている。心理領域では、サポートに関する調査、合宿・大会時の帯同サポート等がなされ、ロンドン 2012 パラリンピックにて日本選手団に心理サポートが加わった。JPC による心理サポートは、心理的競技能力や個別性を踏まえた増強方略等の調査と心理サポート実践の 2 本の柱から構成され、それぞれの心理スタッフがサポートの実践と領域での事例検討がなされ、また研究者としても活発な活動をしている。現在の心理サポートは、JPC サポートに加え、日本スポーツ振興センター、国立スポーツ科学センターにおける様々なサポートがなされている。

パラスポーツは、同じ競技であっても、先天性、事故や疾病等による中途障害、また運動・スポーツ経験の違い等といった文脈が異なり、個別性が重要視される。加えて、パラスポーツ独特の競技や種目もあり、様々な視点での特徴的なサポートの要望も

見受けられる。パラアスリートを取り巻く競技環境は、競技スタッフ（監督・コーチ、メカニック、医科学情報スタッフ等）、医務スタッフに加え、ガイドランナーやパイロット、競技アシスタントといった選手を支える様々な体制がある。その中で、心理サポートは、選手と心理サポートスタッフの良好な関係性だけではなく、監督やコーチはもちろんのこと、競技パートナーやアシスタント、スタッフとの関係性も重要となる。監督・コーチの心理サポートの理解や情報共有はもちろんのこと、選手に近いスタッフの方々ともサポートの理解が望まれる。そのサポートは、東京 2020 パラリンピックに向けた一時的なものではなく、様々な障害特性を鑑みた継続的な研究や医科学情報サポートが必要である。

振り返れば、東京 1964 パラリンピックオリンピックの翌年である 1965 年に「日本障がい者スポーツ協会」が発足、長野 1998 パラリンピックの翌年に「日本パラリンピック委員会」が設立された。日本は、東京 2020 パラリンピックの後、パラスポーツにとってどのような劇的な変化をもたらすのか、そのきっかけになるのか、期待したい。

本シンポジウムでは、東京パラリンピックとその後における心理を含めた医・科学・情報サポートについて、様々な立場のコーチや心理スタッフと協議させていただき、貴重な意見交換をさせていただきました。これからのパラスポーツの普及や発展、心理サポートに少しでもお役に立てれば幸いです。



演者：橋口泰一氏

演者報告「指導者の立場からみえる心理サポート」

西山哲成（日本体育大学）

1. 指導者としての背景

本発表の導入では、発表の内容に関する私の背景、指導内容等の自己紹介から始めた。日本体育大学の自転車競技部監督を2008年より12年務めてきた。同競技未経験者であるので、より客観的な指導方法を用いて国際的に活躍する選手育成を目指す立場であった。自身の大学院生時代には運動生理学、バイオメカニクスを学び、その後、医学部で基礎生理学を学び、再びの本学着任後には主に生理学、バイオメカニクスを用いた競技力向上を学びの中心としてきた。監督着任前にはスピードスケートのナショナルチームなど複数種目の科学サポート、研究を経験したことも今の采配の背景にある。時には科学者、時にはコーチと立ち位置を変えながらコーチングのレベルアップを如何に進めるかを考えてきた。トレーニング計画作成や、トレーニング時の叱咤激励、寮生活指導についてもワンマン指導者的に関わった。また、競技場での走行パワー、ペダリングスキル、筋電図、筋血流、空気抵抗を知るための風洞実験、また持久力、筋力、体組成など、定期測定や試合データを熱意ある科学サポーター達によって得ることができ競技指導に役立ててきた。これまでの競技成果については、監督を始めて5年目頃からナショナル選手が生まれ、今ではOBOG含めて10数名を越え、世界選手権出場や入賞レベルにまで届き始めたが、オリンピック出場は未だなく、そのレベルでの活躍が先の目標である。

2. 心理サポート利用とその感想

私が選手のパフォーマンスやトレーニングの評価、修正を考えると「心・技・体」の3つの構成要素から検索を始める場合がある。そして、「技」についても「体」についても「心」無くしての改善はありえないと考え、3つの構成要素の中で最も重要な要素は「心」として扱うことが多い。ゆえに、本

学にあるアスリートサポートシステム（NITTAIDAI ATHLETE SUPPORT SYSTEM: NASS）においても、心理領域のサポートを毎年要望しており、かつヘビーユーザーである。しかしながら、実際には心理領域の中のどのようなサポートをお願いすればよいのか、未だ適切なサポート内容を選択できていないと思っている。専門家と話をしては「モチベーション」「チーム環境整備」「計画づくり」「考えるスキル」などのテーマが出て、セミナーをお願いしたり、個別のカウンセリングにも対応していただいている。そして、選手たちに関われば「役立つと思うし有難い」と述べる者が少なからずいるので効果はあったのだと思うが、私の意識においては、そのサポートの貢献はどの程度だったのか、また、次にはどのようなサポートをお願いしようか等について、申し訳ないがいつも漠然としていて明確に評価することは難しい。

例えば持久力や筋量などの生理学的データのような客観数量を用いたサポートと同じ様に考えるのは間違いなのだろうと思うが、「心」の重要性はだれもが認める所である。この心理サポートにおける競技力向上への貢献を選手、コーチが、もっともっと理解し、評価し、有効に使えるようになってほしいと思う。貴重な発表の場を与えていただきました関連各位には心より御礼申し上げます。



演者：西山哲成氏

傍聴記

實宝希祥（国立スポーツ科学センター）

我が国では、2020年に東京オリンピック・パラリンピック競技大会をむかえる。それに伴い、アスリートはもちろんのこと、指導者やサポートスタッフ、サポート内容への関心も高まっているように感じる。特に、アスリートの心理面については、2015年のラグビー日本代表の活躍や、2018年に自民党内に「メンタルトレーニング推進議員連盟」が立ち上げられたことから注目されている。本シンポジウムでは、体育・スポーツ心理学領域と他領域の連携を目指し、指導者や他領域の科学スタッフと、どのような連携が望まれるかについて議論がされた。

荒木香織氏（園田学園女子大学）は、「組織を鍛える：スポーツメンタルトレーニング指導士の役割」について話題提供された。近年では、これまで指導者が一手に担っていた選手やチームの育成などが、スポーツ科学領域の発展により、多様な専門家がその役割を分担する傾向にある。そこで、ラグビー日本代表のメンタルコーチを務めた際の話をはじめ、SMTの役割、理論を持った上でのスキル指導の重要性などを話された。また、組織文化モデルをとりあげ、組織を鍛えることについて、心理学を実践するためのコンピテンシーについて言及され、複数の他領域の専門家の仕事を理解し協働することで生産性は向上すると述べた。

橋口泰一氏（日本大学）は、「パラアスリートにおける心理サポート」について話題提供された。パラリンピックの起源から始まり、リハビリテーションからスポーツへの発展の歴史的背景や、パラリンピックの語源について、障害の種類と国際大会について説明がされた。また、パラリンピックムーブメントの目指すもの、日本パラリンピック委員会における医・科学サポート事業内容を通し、2020年東京オリンピック・パラリンピックがパラスポーツに劇的な変化をもたらすきっかけになると述べられた。

西山哲成氏（日本体育大学）は、「指導者の立場

からみえる心理サポート」について話題提供された。西山氏の専門領域はバイオメカニクスであり、自転車競技部の監督を務めている。その中で、国際レベルで活躍するには、生理学やバイオメカニクスだけでなく、「考える力（戦略、計画性など）」が必要であると考え、心理サポートスタッフに相談する機会を設けたことを述べた。心理サポートの重要性を認めつつ、心理サポートの専門家に何をオーダーすべきなのか、また、心理サポートにおける評価の不明確さを挙げた。心理サポートだけでなく、生理学的なサポートについても同様であるが、競技力向上への貢献を選手やコーチが評価できる、分かりやすい心理サポートを望むとして発表を締め括った。

ディスカッションの時間ではフロアも交え、スポーツ心理学者としての関わり方、選手の自主性・主体性、科学者が選手をサポートする上でのモチベーション、心理サポートの評価についてなど、闊達な意見交換が行われた。最後に、司会である高井秀明氏（日本体育大学）が、指導者、科学スタッフと協働するやり方を追求していくと、締めくくった。

本シンポジウムでは、SMTを実施する上での他領域との連携の重要性について学ぶことができました。アスリートを支援する立場である以上、自身の中だけで完結するのではなく、他領域への興味、関心や理解、そして連携が必要不可欠であることを再確認できました。末筆ながら、貴重なお話をいただきました司会、演者の先生方に厚く御礼申し上げます。



シンポジウムの司会・演者の先生方

司会報告

工藤和俊（東京大学）

日本体育学会第70回大会では、国際交流事業の一環としてヨーロッパスポーツ心理学会の会長であるMarkus Raab教授（German Sport University Cologne, London South Bank University）をお招きし、体育心理学専門領域にて特別レクチャーを開催しました。

Raab教授は認知心理学と身体運動科学の2つの分野で博士号を取得しており、両分野の橋渡しとなる研究を推進しています。また、ヨーロッパスポーツ心理学会の会長として「2050年のスポーツ・運動心理学」という展望記事を執筆しており、「科学・スポーツ・社会」の結びつきの重要性を強調しています（Raab, 2017）。

さらに、スポーツのみならず、ダンスや音楽活動など、幅広いパフォーマンスを対象としたperformance psychologyを提唱しており、関連する書籍も出版されています（Raab et al., 2015）（私自身は2016年度の大学院講義の参考書として本書籍を利用しました）。この本の特徴として、従来から運動心理学領域で強調されてきた「知覚-行為」関係を拡張し、「知覚-認知-行為-情動」の関係を統合的に捉えようとする点が挙げられます。今回のレクチャーで紹介された“motor heuristics”の研究も、運動場面における直感的判断が知識獲得時における身体状態に依存することを示すものでした。また、レクチャー後半の「クライミング」研究は、拡張された身体、身体性認知、ミニマムセルフ（自己所有感、自己主体感）など心理学における近年のトピックと関連付けた綿密な計画が立てられており、研究計画の立案という観点からも大変参考になる内容でした。

レクチャーに続いてRaab教授にはランチョンセミナーにも出席頂きました。その際、各演者の発表スライドを事前に確認のうえ、詳細なコメントを文書にてお送り頂いていたことをここに記しておきた

いと思います。また、国際交流委員会・若手研究者委員会合同企画シンポジウムや体育心理学専門領域の口頭発表にも参加頂き、発表への有意義なコメントを頂きました。

そのほか、Raab教授が多くの共同研究者と幅広くコラボレーションして学際的研究を精力的に推進している背景を伺ったところ、ご自身のマックス・プランク研究所でのポストドク経験が大いに役立っているとのことでした。世界有数の先鋭的研究を推進するマックス・プランク研究所のポストドクは、分野の異なる研究者とペアを組んで学際的共同研究に取り組むことが要求されるとのことです。このような経験はまた、バスケットボール、テニス、卓球、サッカー、ゴルフ、野球などきわめて多くのスポーツ種目に関連した研究にもつながっているものと思われ（例えばBar-Eli et al., 2006; Klämpfl et al., 2013; Raab et al., 2005; Raab et al., 2012）。また、レクチャー後半で紹介されたクライミング研究は、東京オリンピックにおいて新たに「スポーツクライミング」が導入されたことに対応して措置された基礎研究費を用いて行われたものです。ドイツでは新たなオリンピック種目が導入されると、その種目に対してポストドク雇用費を含む基礎研究費が措置されるのだそうです。

今年度の国際交流企画は、運動のヒューリスティクスおよび身体性認知という研究内容のみならず、研究の進め方や研究者育成という観点からも大変有意義な企画になりましたことを、日本体育学会本部、関係の先生方、ならびにご来場の方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

Bar-Eli, M., Avugos, S., & Raab, M. (2006) Twenty years of “hot hand” research: Review and critique. *Psychology of Sport and Exercise*, 7 (6), 525-553.

- Klämpfl, M. K., Lobinger, B. H., & Raab, M. (2013).
How to detect the yips in golf. *Human Movement Science*, 32 (6), 1270-1287.
- Raab, M., Masters, R. S., & Maxwell, J. P. (2005)
Improving the ‘how’ and ‘what’ decisions
of elite table tennis players. *Human Movement Science*, 24 (3), 326-344.
- Raab, M., Gula, B., & Gigerenzer, G. (2012) The hot
hand exists in volleyball and is used for allocation
decisions. *Journal of Experimental Psychology:
Applied*, 18 (1), 81.
- Raab, M., Lobinger, B., Hoffmann, S., Pizzera, A.,
& Laborde, S. (Eds.) (2015) *Performance
psychology: Perception, action, cognition, and
emotion*. Academic Press.
- Raab, M. (2017) Sport and exercise psychology in
2050. *German Journal of Exercise and Sport
Research*, 47 (1), 62-71.



司会・工藤和俊氏（左）と演者・Raab氏

特別レクチャー

Climbing to yourself: A New Perspective on Motor Heuristics and Embodied Choices

Markus Raab^{1,2} (¹German Sport University Cologne, ²London South Bank University, UK)

Keywords: simple heuristics, motor control, motor learning, embodied cognition

Abstract

Human performance requires choosing what to do and how to do it. The goal of this theoretical contribution is to advance understanding of how the motor and cognitive components of choices are intertwined. From a holistic perspective I extend simple heuristics that have been tested in cognitive tasks to motor tasks, coining the term motor heuristics. Similarly, I extend the concept of embodied cognition, that has been tested in simple sensorimotor processes changing decisions, to complex sport behavior coining the term embodied choices. Thus both motor heuristics and embodied choices explain complex behavior such as studied in sport and exercise psychology (Raab, 2017).

The goal of the talk is to present the state of the art in complex motor skills in sports followed by an introduction of motor heuristic as rule of thumb that allows an athlete to choose between movements whereas embodied choices are rules of thumb when deciding quickly between options. Both concepts stress the importance of embodied cognition to quantify and specify how movements and cognitive processes are related. I will present a set of studies on embodied choices from simple perceptual judgments to complex climbing tasks. Climbing to yourself is a project from the Priority program of the German Research Foundation I will use to illustrate how motor skill development enhances cognitive functions. I conclude from the set of studies that we are able to quantify and specify some of the effects own movements can have on higher cognitive processes such as perceptual judgments, problem solving solution generation or planning (Raab, 2017).

The impact of these studies relates to the acceptance that action, perception and cognition are more linked than previously thought and that producing choices should consider the actors own bodily system and the motor experiences.

Hoffmann, S., Borges, U., Bröker, L., Laborde, S. J. P., Liepelt, R., Lobinger, B. H., ... Raab, M. (2018). The Psychophysiology of Action: A Multidisciplinary Endeavor for Integrating Action and Cognition. *Frontiers in psychology*, 9, [1423].

Raab, M. (2017). Motor Heuristics and Embodied Choices: How to Choose and Act. *Current Opinion in Psychology*, 16, 34-37. <https://doi.org/10.1016/j.copsyc.2017.02.029>

Raab, M., & Gigerenzer, G. (2015). The power of simplicity: A fast-and-frugal heuristics approach to performance science. *Frontiers in psychology*.



演者：Markus Raab 氏

傍聴記

高御堂良太（名古屋大学大学院）

日本体育学会第70回大会において、Markus Raab先生の特別レクチャーをお聴きしました。自分のポスター発表の直後ということもあり、慌しく会場移動を行なう中でありましたが、その後のランチョンセミナーも含めて、大変有意義な時間を過ごせたと感じています。発表のタイトルはClimbing to yourself: A New Perspective on Motor Heuristics and Embodied Choicesで、タイトルの通りスポーツ場面での運動のような、複雑な運動課題の遂行における heuristic（経験則的、外的な情報に基づく）な方略と embodiment（身体基準、内的な情報に基づく）な方略の果たす役割に関して、Raab先生が取り組んでおられるクライミング課題に関する研究も交えてのお話でした。英語でのご発表でしたが、具体例を随所で交えつつ分かりやすく説明して頂けたおかげで、私のような拙いリスニング能力を持つ人間でも、なんとか発表についていくことが出来ました。以下では、傍聴記の執筆に当たって自主的に拝読させて頂いた文献等を含めて、ご発表をお聴きした感想、所見を述べさせて頂きたいと思います。

私達ヒトがスポーツ場面において何らかの意思決定をするとき、決定に用いる情報には様々なものが考えられます。例えば、クライミング課題においては、自分の身体を上昇させるには、突起の配置や壁の傾斜等の外的な環境に存在する情報だけでなく、自分の手足の長さ、筋力といった内的な情報も利用することがあります。Raab先生はこのうち、外的な情報を用いた認知的、経験則的、計算論的な意思決定方略を、heuristic (Motor heuristics) な方略、自分の内的な情報を用いた直感的な方略（直感という表現は少し語弊があるかもしれませんが）を embodiment (embodied choices) な方略と定義しているようです (Raab, 2017)。また、この場合の heuristic という表現には、ボールゲーム

における試合の流れ (streaks, hot hand) のような抽象的な概念も含んでいるようで (Raab and Gigerenzer, 2015)、一般的な「経験則」という表現以上に幅広い情報を網羅しているように感じました。このような計算論的、制御論的な方略と身体基準の方略はたびたび相容れない、対立したものとして扱われることがありますが、Raab先生はこれらを統合して、運動課題中におけるヒトの知覚-行為システムを理解しようと試みており、大変興味深く感じました。私自身も普段は野球型競技という特定のスポーツを対象に研究を行なっていますが、Raab先生のお話を聞いて、特定の競技だけでなく、幅広くヒトの理解を得ようとする視点の大切さを再認することとなりました。発表を聞きながら今後のRaab先生の研究のご発展を非常に楽しみに感じていました。

最後になりますが、このような素晴らしい機会を用意して頂いた慶応義塾大学を初めとする大会運営委員会の先生方、体育心理学専門領域の先生方に御礼を申し上げます。今回の学会大会では、特別レクチャーを含め、シンポジウム、キーノートレクチャー等、魅力的な企画が多く、自分の見識を拓ける良い機会となりました。学会大会で得られた見識を自らの研究に活かし、ヒトがスポーツ場面で見せる、複雑で興味深い運動を少しでも理解できるよう、今後も尽力していきたいと考えています。

司会報告「体育・スポーツ心理学研究領域のこれから」

山本裕二（名古屋大学）

本ランチョンセミナーは、体育心理学専門領域と日本スポーツ心理学会の統合問題を検討してきた経過報告と現状について報告し、会員の意見を聞くことを意図し開催されたものであった。

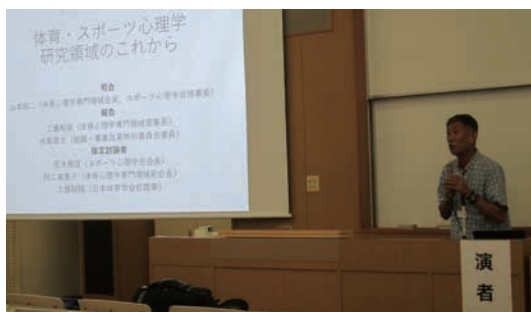
まず、体育心理学専門領域の理事長である工藤和俊先生（東京大学）から、これまでの統合問題に関するワーキンググループの検討経過、および2月にWeb上で行われた、体育心理学専門領域と日本スポーツ心理学会会員を対象とした統合に関するアンケート調査の結果について説明があった。回答者数は65名と少なかったものの、回答者の意見は統合を進めるべきであるとする意見が7割近くを占めていた。その後、このアンケート結果も踏まえた3月末の両団体の合同理事会での議論として、統合により専門領域のみの会員は会費が大幅増となるため、全体として会員は減少する可能性が高いこと、体育学会では専門領域を解消する方向で議論が進んでいるため、専門分野の基盤強化が必要であること、公認心理師資格の誕生に伴い、「心理学」名称使用が困難になる可能性があることなどが報告された。

続いて、日本体育学会の改革についての現状として、昨年度12月以降に日本体育学会に設置された組織・事業改革特別委員会の報告を、体育心理学専門領域からの委員であった木島章文先生（山梨大学）から行ってもらった。ここでは、日本体育学会の学会大会のあり方と研究組織の再編について話し合われた旨報告があった。まず、学会大会では、従来専門領域ごとに行ってきたシンポジウムと口頭発表は廃止し、新たにテーマ別の「部会」を編成し、その「部会」ごとにシンポジウムと口頭発表を行うという案である。このテーマとしては、学校保健、生涯スポーツ、競技スポーツ、健康福祉の4つが案として挙がっており、従来の研究方法論での区分ではなく、あくまで実践的・社会的課題の解決を目指した連携を図る場とするということである。この案では、専門領

域としては、キーノートとポスター発表を企画していくことになる。そして、既存の専門領域を再編成した新たな研究組織として「部門」が提案され、文系領域1（人文科学系）、文系領域2（社会科学系）、理系領域1（生命科学系）、理系領域2（自然科学系）、実践系領域の5つの「部門」が想定されているということであった。

その後、日本スポーツ心理学会会長である荒木雅信先生（日本福祉大学）、日本体育学会監事、日本スポーツ心理学会副会長でもある阿江美恵子先生（東京女子体育大学）、日本体育学会研究組織検討特別委員会委員の土屋裕陸先生（大阪体育大学）から指定討論者としてご意見を伺った。荒木先生と阿江先生からは体育心理学とスポーツ心理学が統合することによって力を結集すべきであるため、日本体育学会の動向は見ながらも統合に向けた検討がさらに必要であること、土屋先生からは现阶段では日本体育学会では「部門」の話は議論されておらず、あくまで学会大会のあり方の検討が先決事項として議論されていることなどが指摘された。

ランチョンセミナーに参加していただいた会員の多くは日本スポーツ心理学会の会員でもあった。会費の問題や学会での発表資格の問題、事務局の問題もあるが、両団体の合同理事会などを開催し、シンポジウムの企画等、できることから統合に向けての検討を継続することとなった。



司会：山本裕二氏

傍聴記

中本浩揮（鹿屋体育大学）

タイトルと演者の先生の名前だけをみて、各領域の代表者が描く体育・スポーツ心理学の未来を聞ける！なんと魅力的なランチョンセミナーだろうと参加させていただいた。が、実際の内容は、体育心理学専門領域とスポーツ心理学会の統合、日本体育学会の組織再編についてであった。勝手な想像をしていたこともあって、組織に関する大きなテーマの傍聴記を引き受けたことに開始早々気づき、不安を抱えながら聴講させていただいた。

学会組織は言うまでもなく学問専門者にとっては最も重要なコミュニティである。学会という場・組織が無ければ自己研鑽の場が失われてしまうし、何よりも学問の体をなさなくなってしまう。学会組織運営のために膨大な時間を割いてくださっている先生方にまず初めに謝意を表したい。

セミナーでは、まず工藤先生から統合によるメリット・デメリットが提示された。私が興味を持った内容は「スポーツ心理学会からすれば、体育学会と統合することでスポーツ心理学は心理学領域から離れ体育学よりになる」という点である。つまり、親学問の問題である。

私が所属する鹿屋体育大学は、体育学部の単科大学であり、常々「体育学」とはなんぞや、どのような独自性を持った学問なのかと悩まされる環境にある。一方で、学内の何気ない会話では、あなたは心理学専門、私は生理学専門といったように、あくまで体育・スポーツ〇〇学は〇〇学を親学問とした応用学問であるという印象を持つことは少なくない。つまり、興味を持ったのは、工藤先生は体育学という学問を心理学と対等な親学問として述べられた（のではないか）ということである。

この意識は、体育学会の組織再編の一つの特徴である部門と部会の話にも関係する。部門は大会・企画委員会の下部組織で、何か共通テーマ（例えば、競技スポーツ）を掲げて専門領域に関係なくセッ

ションを組む。部会は、既存の専門領域を再編成した組織で（例えば、自然科学、人文科学領域など）、領域横断的にテーマに取り組む。このような再編は、体育学会としての長い積み上げの末、体育学が応用学問から脱皮し、親学問として体を為すほど成熟した、または脱皮しかけているのだと感ずる内容であった。

一つの定義によれば、「科学とは、物事の在り方、起こり方についての法則を、独自の合理的な方法によって明らかにしようとする営みと、その成果としての知識の体系」（森正、2004）とされる。統合や再編によって、領域横断的な研究が進み、これまではない独自の方法が生み出され、新たな知識体系（学問）の発展に繋がるかもしれないという希望を個人的には持てた。

もちろん心理学は大好きであるし、体育・スポーツ心理学というアイデンティティは強くあるが、体育大学の出身で体育学の専門大学に所属する身としては、競技体育学、さらには心理体育学（心理を体育学の研究手法を用いて解明する）などと、いつの日か体育学が親学問の看板を背負った領域になれるように努力したいと思うセミナーであった。特に、体育・スポーツ心理学は自然科学的でもあり人文科学的でもある。領域横断的な研究を推進するために、我々が各専門領域の橋渡し役となって推進していければと思う。

司会報告「日独体育心理学交流」

國部雅大（筑波大学）

学会大会最終日の9月12日（木）12:30～13:30に、体育心理学専門領域が企画するランチョンセミナーとして実施された「日独体育心理学交流」の司会を担当しました。直前のRaab先生による特別レクチャーに引き続く形で、日本から運動学習領域の2名の先生方（田中美史先生、樋口貴広先生）に話題提供を依頼し、Raab先生を指定討論者として、体育心理学の研究に関する議論や意見交換をするという趣旨の企画でした。司会、発表および質疑応答は基本的に英語で行い、必要に応じ日本語で補足説明を加える形式をとって進行していきました。

会場には、直前に行われた特別レクチャーから続いて参加された方々だけでなく、このランチョンセミナーから参加された方々もおられました。また、他専門領域の方々の参加もみられました。参加者にはセミナー開始前に弁当が配布され、昼食をとりながら聴講していただくことにより、やや気楽な形でセミナーに参加していただくことを意図しました。まずセミナー冒頭にて、直前の特別レクチャーの内容を簡単に振り返るとともに、本企画の趣旨説明ならびに話題提供者の先生方の紹介を行いました。

1人目の発表者は田中美史先生（武庫川女子大学）で、「プレッシャー下の運動パフォーマンス分析研究の過去と現在」というテーマでの話題提供が行われました。発表では、これまでに行われてきたプレッシャーに関する研究のレビューや、田中先生がこれまで行われてきた様々なプレッシャー研究の紹介がされました。Raab先生からの質疑応答では、実験室環境でのプレッシャー実験の知見と実際のスポーツ場面との対応関係についての質問やコメントがありました。今後の研究において非常に重要な点についての示唆がなされました。

2人目の発表者は樋口貴広先生（首都大学東京）で、「適応的歩行調整—“motor heuristics”と“embodied cognition”に基づく理解—」というテーマでの話題提供が行われました。樋口先生の研究テーマの1つである歩行時の障害物回避行動における空間と身体の関係に基づく行動調整や身体化現象において、

Raab先生が紹介された研究との関連をふまえた形での説明がありました。質疑応答においては、適応的な歩行調整がどのようなプロセスで処理されるかについて、多様な観点からの意見交換がなされました。

私は英語で実施されるセミナーの司会をするのが初めてで、いろいろと不慣れでうまく進行できなかった点がありました。特に質疑応答中は、参加者全体を含めた議論の流れを作りたかったのですが、それがうまくできなかったことが私自身の反省点です。

今回指定討論者となっていたいただいたRaab先生は、非常に多くの研究論文を発表されており、現在はヨーロッパスポーツ心理学会（FEPSAC）会長の要職を務めておられます。ご多忙の中、前日の打合せにも快くご参加くださいました。さらに、Raab先生は会期中の情報交換会や本部企画シンポジウム等多くのプログラムにも参加され、そのお人柄に触れられたことは、私にとって非常に貴重な経験となりました。

1時間という限られた時間の中で、議論の時間をできるだけ長くするため、話題提供者の先生方には12～13分といった短い時間での発表にまとめていただき、Raab先生との議論も活発に行っていたことにより、大変感謝いたします。今後も、体育心理学専門領域で、国際的な視点での研究交流を継続していくことの意義を感じたセミナーとなりました。

最後に、弁当配布や会場設営など、本セミナーの円滑な進行にご協力くださったスタッフの方々、ご参加くださった先生方に感謝を申し上げます。



司会・國部雅大氏（左）と演者の先生方

演者報告「Past and present research analyzing motor performance under pressure」

田中美吏（武庫川女子大学）

話題提供の概要

13分ほどの時間で、上記の題目に関するこれまでの私たちの研究について、英語を中心に、時々日本語での補足説明も交えながら紹介しました。短い時間ではありましたが、①プレッシャー研究の背景、②動作と知覚に関する研究紹介、③今後の研究の展望の3部構成で話題を展開しました。

①プレッシャー研究の背景：スポーツ・学校体育などの様々な場面でプレッシャー下でのパフォーマンス発揮は多くの人が悩む問題であり、国内外で60年近くも前から膨大な研究が行われています。プレッシャー下でのゴルフパッティングを課題とした実験研究は48編も論文があることや、究極のプレッシャー状況ともいえるサッカー・ワールドカップでのPK戦のシュートの成功率のデータを紹介しました。また、これらの膨大な先行研究は、プレッシャー下でのパフォーマンスの発現過程を明らかにするメカニズムの研究と、プレッシャー下でのパフォーマンス低下の予防・対処法の研究の2タイプに大別できることも話しました。

②動作と知覚に関する研究紹介：私たちのこれまでの研究では、プレッシャー下でのパフォーマンス発揮に関わる運動制御メカニズムを調べる研究に多くのエフォートを割いてきました。その中から、プレッシャー下での卓球のフォア打ちやゴルフパッティングの動作、陸上走高跳のバーの高さ知覚に関する研究成果を動画や図を交えて説明しました。特に、プロゴルファーであっても実験室内での軽度のプレッシャー操作によって動作が小さく遅くなるが、プロゴルファーの中でのトップレベルの選手は同じ実験であっても他の多くのプロゴルファーが起こすような動作変化は生じず、プレッシャー下での動作変化を意図的に修正していることを解説しました。

③今後の研究の展望：指定討論のRaab先生の長年取り組まれている研究テーマでもあります「意思決定 (decision making)」を含めてプレッシャー下

でのパフォーマンスを理解する研究を今後実施していきたいことを伝えました。

Raab先生の指定討論

Raab先生からのコメントや質問に対する私の理解とリプライがなかなか追いつきませんでした。概ね以下のような質問、研究の問題点、ならびに今後の研究への提案を投げかけていただきました。

①どうすればトップレベルのプロゴルファーのようなプレッシャー下でのパフォーマンス発揮ができるか？（それに対して性格特性は関与するか？）

②スポーツの試合場面で強度の高いプレッシャー状況を実験室環境では再現できない問題（生態学的妥当性）に対して、どのように今後の研究で対応するか？

③VR（仮想現実）内でのプレッシャー状況の疑似体験、コルチゾールや心拍変動（HRV）などの生理指標を利活用することの有効性

謝辞

この度のランチョンセミナーでは、英語での話題提供と質疑応答という私にとっては大変チャレンジングな機会をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。話題提供を担当する話をいただいてから当日に至るまで、様々な先生方の助言や支援を受け、話題提供を終えることができました。至らなかった点は次への反省材料とし、さらに研究活動を進めていきたいと考える節目にもなりました。登壇されました國部先生（司会）、樋口先生（話題提供）、Raab先生（指定討論）をはじめ、関係者各位に改めまして深謝いたします。



演者・田中美吏氏（中央）と指定討論者・Raab氏

演者報告「Adaptive locomotor adjustments: understanding based on the concept of “motor heuristics” and “embodied cognition”」

樋口貴広（首都大学東京人間健康科学研究科）

ランチョンセミナーの話題提供者の一人として発表をいたしました。その概要を報告いたします。話題提供のテーマは、「適応的な移動行動の調整作用」でした。Raab氏が講演にて提唱された、「motor heuristics」と「embodied cognition」の概念を当てはめて説明するという試みを行いました（正式タイトル: Adaptive locomotor adjustments: understanding based on the concept of “motor heuristics” and “embodied cognition”）。

「motor heuristics」とは、経験則に基づいて、素早く・効率よく判断するプロセスです。素早さ・効率性を優先するため、言い方を変えれば、大雑把な判断(rule of thumb)をすることになります。「embodied cognition」とは、身体情報が参照される形で認知情報処理が行われることを示す概念です。空間の特性が身体の情報と関連付けられていることや、“大きい”という文字の処理は、大きな動作を実施している時の方が、小さな動作を実施している時よりも処理が容易、といった現象を総称している概念です。

歩行中に段差をまたぐ動作に着目すると、脚は段差よりもかなり高くあげる傾向があります。安全マージン（つま先と段差との空間）は、時に10 cm程度となることもあります。もっと慎重に動作を遂行すれば、安全マージンはずっと小さくなるはずですが、しかしそうした慎重な動作には時間がかかる（大きく減速する）という弊害があります。歩行においては目的地に素早く到達することも重要ですので、マージンのある程度大きくすることで (rule of thumb)、極端に減速させない方略をとっていると考えられます。

障害物回避動作を観察すると、空間と身体との相対関係が瞬時に知覚され、行動調整に活かされてい

ることがわかります。身体化が起こっているわけです。スポーツ熟練者は、長年訓練してきた環境においては身体化現象が見られます。逆に未経験の要素を環境に含めると、身体化現象が見られなくなることもあります。

当日はこれらの内容を網羅的に、12分の時間を使って英語発表いたしました。Raab氏からは、「適切な空間マージンを生成できるようになるためにどのような要因が重要か」「適応的歩行調整に必要な2つの状況判断（調整は必要か、どの程度調整するか）」は、単一の（系列的な）プロセス、それとも独立したプロセスで処理されるか、などの質問を頂戴しました。当日提示した情報に基づき、可能な限り誠実に回答したつもりです。

Raab氏は数多くの業績を残された著名な先生ですが、我々の話を大変熱心に聞いてくださり、議論してくださいました。事前に実施された打ち合わせの席でも、大変紳士的に様々な議論をしてくださいました。知識だけでなく、振舞いとしても大変勉強になりました。このような機会を提供くださった関係者の皆様に心より感謝いたします。特に、司会進行から事前の準備までご配慮くださった、國部雅大氏（筑波大学）に感謝いたします。



演者・樋口貴広氏（中央）と指定討論者・Raab氏

傍聴記

横山慶子（名古屋大学）

このランチョンセミナーでは、日独体育心理学交流をテーマとして、Markus Raab 先生の特別レクチャーの直後に開催されました。Raab 先生のレクチャーでは、身体運動によるヒトの振る舞いを、過去の経験に基づいてシンプルに素早く運動を決定する処理プロセス（motor heuristics）や、身体に埋め込まれた情報を利用した認知的な選択（embodied choices）といった概念で説明されていました。こうした概念が、その他の研究アプローチと、どのような接点があるのだろうかと考えていたところ、まさにその疑問に関わるランチョンセミナーが、國部雅大先生（筑波大学）の司会のもと開始されました。

まず、田中美史先生（武庫川女子大学）が「Past and present research analyzing motor performance under pressure」という題目でご講演されました。田中先生らによる卓球選手を題材とした最近の研究では、プレッシャーが加わった場合は、そうではない場合と比較して、運動パターンが小さくなる傾向であったそうです。一方で、プロゴルファーのような高いレベルの選手は、プレッシャー下であっても通常と遜色ない動きが可能だそうです。プレッシャーとは、望んでいないのに勝手に湧き上がる心理的な事象で身体に影響を及ぼしますが、エキスパートは、それが顕在化されないようです。Raab 先生の場合でいうと、アスリートは、プレッシャーがある状況さえも身体に埋め込まれているのかもしれませんが。Raab 先生と田中先生の議論では、プレッシャーという実体のない心理的な事象と身体の関係を探り出すことの難しさについて考えさせられました。

次に、樋口貴広先生（首都大学東京）が、「Adaptive locomotor adjustments: understanding based on the concept of “motor heuristics” and “embodied cognition”」という題目でご講演され

ました。ヒトは、障害物があっても、その状況に適応して歩行を調整することができます。例えば、障害物がある際の歩行においては、安全なマージンをとる「rule of thumb（大雑把な）」調整方略により、適応的な歩行調整がなされるようです。また、走りながら隙間を通り抜ける課題では、いつ身体を回転させるかという認知的な選択が重要であり、その調整ストラテジーは、経験を積むことで身体化されることが、アメフト選手を題材とした研究で確かめられているそうです。これらの研究は、Raab 先生の提唱する motor heuristics や embodied choices といった概念との接点を強く感じました。また、Raab 先生と樋口先生の議論を通じて、知覚と身体、さらに認知と身体の循環的で不可分な関係性について理解を深めることができました。

講演者の先生方のご発表は、十数分という短い時間でしたが、Raab 先生との討論を含め、多くの重要な情報を得て学ぶことのできる貴重な機会となりました。ご登壇された先生方、企画・運営に携われた先生方の工夫が随所に感じられたセミナーでした。

座長報告

三村 覚 (大阪産業大学)

9月10日10:30より、口頭発表1のセッションが行われた。発表題数は4題で、いずれも興味深い実践的研究であった。

まず、藤本雄太先生(びわこ成蹊スポーツ大学大学院)から“どのように「再発の恐怖」と向き合うのか-受傷アスリートのリハビリ期に着目して-”というタイトルで報告された。研究は、リハビリ期にある4名の受傷アスリートへの聞き取りから、質的分析によって進められていた。結果的に、“再発の恐怖と向き合い克服していくことで主体性を獲得していくプロセス”として、“受傷”“現実を逃避し彷徨う”“再発の恐怖と直面する”“リハビリへ主体的に取り組む”の4つのプロセスが示された。この示唆は、受傷者に対して心理サポートを展開する際の選手理解に有益なものと考えられた。

次に、中山雅之先生(国士舘大学)から“そこそこの野球青年の対象喪失プロセス-キャリアトランジションの質的研究-”というタイトルで報告された。小さいころから野球をしていた社会人を対象者とし、野球を“愛着”の対象と捉え、野球をあきらめることを“喪失”として、いわゆる“喪の作業”の経過について報告された。“対象喪失のプロセス”には“対象の獲得”“対象を維持する努力”“揺らぎと葛藤”“内的喪失”“外的喪失”の5プロセスがあり、彼らは軽度のバーンアウト状態にあったとされた。先生のいわれる“そこそこの”選手は日本のスポーツ界では多数存在していることが容易に予想される。本研究での“喪の作業”についての検討は継続されているところであり、今後の研究に大きな期待が持てた。

続いて、豊田則成先生(びわこ成蹊スポーツ大学)から“スポーツ・インテグリティへの質的アプローチ-現場から10年以上も離れたスポーツ指導者の語りから-”というタイトルで報告された。“スポーツ指導者には懲戒権は認められていない”というショッキングなプレゼンテーションから始まった。

スポーツ場面での、誠実性・高潔性などの意を持つインテグリティ(integrity)をキーワードとして、体罰により現場を離れられた指導者の語りからその内面へのアプローチによって問題提起がなされた。これまでタブー視されて続けてきた体罰の問題についてご発表をされた豊田先生と協力者の方に敬意を表し、本研究の発展とともにスポーツ界での体罰の撲滅を祈念する次第である。

最後に、中内真悠先生(大阪体育大学大学院)から“大学陸上競技選手のパフォーマンス向上における批判的思考態度と動機づけの関連性”というタイトルで報告された。陸上競技部に所属している大学生141名を対象に、記録の更新回数における批判的思考態度尺度とスポーツ動機づけ尺度の関連性の相違について検討された。その結果、記録更新回数の上位群において批判的思考態度尺度での探求心が高得点となること、また批判的思考態度尺度とスポーツ動機づけ尺度での外発的動機づけおよび非動機づけの得点の関係が示唆され、記録の更新回数で両者の関係性に相違があることが示された。今後は、記録の更新回数や時期や頻度などの詳細により選手の内面の変化が起こりやすい条件があるのかどうかについて、個人的に興味をもたれた。

近年、スポーツ場面での事例的な研究の数が多くなっており、様々なアプローチによってより科学的な証拠となりうる試みがなされている。本セッションはそのことを象徴する内容であったと思われる。



座長：三村 覚氏

座長報告

村山孝之（金沢大学）

本大会 3 日目の午後に「口頭発表②」が行われました。このセッションでは、運動制御・学習に関する 4 つの演題の発表が行われました。この日の午前中に Markus Raab 氏の「特別レクチャー」が開催されたこともあり、Raab 氏も Audience として参加してくださいました。

一つ目の演題は、坂部崇政先生（日本体育大学大学院）による「競技者における映像観察時の教示の有無が注意に与える影響」です。指導場面では、指導者の“さじ加減”によって学習者の注意対象や注意量はいかようにも変化します。坂部先生は、映像観察の目的を伝えることで主課題（映像観察）への注意をうながすと二次課題への注意配分が抑制されることが脳波測定によって確認できたという一連の結果を、非常にわかりやすく説明して下さいました。多くの先生方が、明確な目的を伝えることの意味や意義を再認識されたのではないかと感じました。

二つ目は、日本体育大学大学院の浦佑大先生による「ラグビー選手におけるメンタルローテーション能力と状況認知能力との関連」でした。日本中に感動を与えてくれたラグビー日本代表の強さは、強靱な肉体のみならず、素速く正確な予測や状況認知能力によっても支えられているはずですが、浦先生は、メンタルローテーション能力の高さと状況認知能力の間に正の相関関係があることをデータに基づいてわかりやすく紹介して下さいました。視空間性ワーキングメモリの機能を高めることで、多様な種目を対象に状況認知能力を高めるトレーニング法の開発やその重要性を感じさせられました。

三つ目は、山本裕二先生（名古屋大学）による「切替混合力学系によるテニス選手の動きに残る履歴現象」でした。テニスのラリーにおいて、あるショットは前のショットの影響を、前のショットはその一つ前のショットの影響を受けています。山本先生は、連続するラリー中の選手の動き（履歴）のダイナミクスを切替混合力学系という観点から分析し明らか

にされた研究についてご紹介下さいました。履歴内に残る判断や意思決定に関する情報を選手の位置のダイナミクスから推測することは可能か、ポイントパターンを細分化し履歴現象の違いを明らかにすることは可能かなど、ソフトテニスの指導場面をイメージしながら大変興味深く聞かせていただきました。動きとその背景にある心理の関連性を解き明かすための一手になる貴重なご研究であると感じました。

最後は、山田紀史先生（国際武道大学大学院）による「野球の内野手の送球ミスおよび目標からのばらつき増加はなぜ生じるか」でした。内野手は状況に応じて送球場所を柔軟に変更し、正確に送球する必要があります。山田先生はなぜ送球ミスや送球のばらつきが生じるのかという点に着目され、捕球から送球への切替時に告げられる目標とは逆方向に素速く送球しなければならない認知的負荷の高い条件、つまり意思決定までの時間の制約が厳しい条件ほど、捕球動作時間が伸長し送球動作が変化するという結果についてわかりやすくご説明いただきました。会場の多くの先生方が、日頃の練習で認知的負荷を高めて練習することの重要性を再認識されたのではないのでしょうか。

最終日の最後のセッションであったにも関わらず、多くの皆様にお越しいただき、一緒に有意義な発表の場を作っていただきました。4名の演者の先生方、お集まりいただいた皆様、そして大会の運営にご尽力いただいた関係の先生方に深くお礼申し上げます。



座長：村山孝之氏

演者報告

相川 聖 (日本体育大学大学院)

私は9月10日から12日に慶應義塾大学日吉キャンパスで開催された日本体育学会第70回大会に参加し、「競技場面毎のイメージ利用目的の特徴ーテキストマイニングを用いたの検討ー」という演題でポスター発表をさせていただきました。

本研究では、A大学体育専攻学生658名(男性375名、女性283名、平均年齢19.9±2.6)を対象とし、アスリートがイメージを利用する目的を競技場面毎に分析しました。対象者には7つの競技場面(試合前、試合中、試合後、練習前、練習中、練習後、リハビリテーション)でのイメージ利用頻度(6件法)とその場面でのイメージ利用目的(自由記述)について回答を求めました。また、イメージ利用目的は、KH Coder(樋口、2014)を用いた共起ネットワークによって分析しました。

イメージ利用頻度は、試合前が最も高く、次に練習中が高いことが示されました。この結果は、Hall et al. (1990)の研究結果を支持し、イメージトレーニングはパフォーマンス向上を目的とし、試合に関係する内容で実施する必要が示されました。共起ネットワークによる競技場面毎のイメージ利用目的的分析の結果、アスリートは競技場面毎に異なる目的でイメージを利用していることが明らかとなりました。競技場面毎の特徴的なイメージ利用目的は、試合前では「レース展開やプランの確認」、練習前では「練習の課題を確認」、試合中では「相手の動きを予測」、練習中は「試合の想定」、リハビリテーションでは「動機づけの向上」「動きの確認」でした。また、競技場面で共通して見られたイメージ利用目的としては、試合前や練習前では「覚醒水準や動機づけの向上」、試合中や練習中では「フォームや技術、動作の確認」、試合後や練習後では「反省や振り返り」でした。

Cumming & Williams (2011) はアスリートが利用するイメージは状況によって異なると述べてお

り、本研究でも同様の結果が示されました。しかし、競技場面毎に共通する内容も挙げられたことから、アスリートが効果的にイメージを利用するための新たな示唆を得ることができました。本研究の結果を踏まえ、イメージトレーニングを構築・提供することで、アスリートのパフォーマンスや動機づけの向上、覚醒水準の制御などに効果的に作用すると考えられます。

本研究の発表時には、日頃からお世話になっている先生方や発表演題に興味を持っていただいた先生方とディスカッションを行うことができました。数名の先生から本研究のデータに対して、競技レベルや競技種目などの独立変数を考慮して分析することによって、イメージ利用目的への理解をさらに深められるのではないかとのご意見をいただき、今後の研究を進めていく上で貴重な助言を得ることができました。また、共起ネットワークに興味を示される先生も多く、その方々とのデータ収集方法の工夫などについてのディスカッションも有意義な時間となりました。KH Coder(樋口、2014)はフリーソフトで分析方法も多様にあるため、汎用性が高く、興味を持たれていた先生が多いと感じました。本大会での発表を通じて、初めてお話しさせていただく先生もいらっしゃったため、新たな繋がりを築くことができました。

最後に、本大会を開催してくださった慶應義塾大学をはじめとする大会組織委員会の皆様、大会期間中にコメントをくださった先生方へ、この場をお借りして心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

演者報告

三澤孝康（山梨学院大学）

9月10日から12日にかけて慶應義塾大学において、日本体育学会第70回大会が開催されました。

12日午前のポスター発表において、「高密度なパスネットワークを生成するホッケー代表選手の捕球準備行為」という演題で報告をさせていただきました。ホッケー競技はゴール型ボールゲームの一つであり、人工芝ピッチを使用し11人制で行われます。競技の特徴として、右利き用スティックの片面のみ使用可能というルールの制約があり、選手はピッチの右サイドへとボールを運ぶ傾向があります。ゴール型ボールゲームで要求される集団技能の一つにパスネットワークの生成が挙げられます。本研究では、そのネットワークを動的に持続させる選手の運動行為を異なる技能水準間で比較・検討しました。

同じ大学チームに所属する日本代表水準の選手（代表群）とそれに準ずる選手（準代表群）の2群を3名ずつ4チームに分け、それぞれ同じ競技水準のチームとのミニゲームを行わせました。制限時間は2分とし、ピッチサイズを2条件（Small：25m x 15m, Large：30m x 18m）、ホッケー競技の特徴を踏まえた上でボールのリスタート位置を2条件（Right, Left）設定しました。全チームが4つの条件下でゲームを行い、各水準の順序効果を相殺するように試技順のカウンターバランスを取りました。そして、パスネットワークを評価する変数として、ボールがプレーヤーにわたった時点で、その場に出現していたパスコースの数とボール保持1回あたりのボールキープ時間を比較しました。

分析の結果、ボール初期位置はパスコースの数、ボールキープ時間に影響を与えないことがわかりました。しかしパスコースが2つ出現した状況は準代表群に比べ代表群で有意に多く、一方でパスコースが1つしか出現しない状況は、代表群に比べ準代表群で有意に多く出現しました。またパスコースが2本出現する状況と、1本しか出現しなかった状況で

は、ともに準代表群のキープ時間が有意に長いことがわかりました（二本：代表 2.41s < 準代表 2.85s、一本：代表 1.66s < 準代表 2.38s）。

これらの結果は、代表群の選手の方がボールを保持している際に多くの選択肢を持ち、かつ高速でパスを回していることを示しています。この違いを生む背景には、代表群は「いつ、どこで、なにをするか」についてフィードフォワード的な予測が働くことで状況に応じた姿勢の制御ができているのに対し、準代表群は次の状況の予測が難しく、姿勢制御が遅れることで、パスコースが減少し、ボールキープ時間も延長すると考えています。今後は本研究から得られた仮説を数量的に検証するために各プレーヤーのつながりから時系列的な有向グラフデータを構成し、次数や密度などのネットワーク変数を算出したいと考えています。

余談ですが、私は大学での研究・教育活動に加えホッケー指導者として日々活動しております。日本一のチームを作る実践、そして実践から生まれた課題や疑問を研究から明らかにする、その成果を実践に戻す、こうした研究と実践の相互補完的な両立を今後も継続していきたいと思えます。

発表の際に、多くの先生方から様々なご意見やご質問をいただき非常にうれしく感じるとともに、多くの刺激を得ることができました。また、他分野の先生方、他競技の先生方と議論させていただく機会もあり、大変勉強になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。最後に、学会開催にあたりご尽力された関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。

大会参加記

筒井和詩（名古屋大学）

令和元年9月10～12日慶應義塾大学日吉キャンパスにて開催されました、日本体育学会第70回大会に参加しましたので、その概要と感想を報告させていただきます。

学会会場となりました慶應義塾大学日吉キャンパスは、横浜駅、東京駅、品川駅等からのアクセスが容易であり、県外からの参加者に優しい立地であると感じました。また、最寄りの日吉駅周辺には飲食店やカフェが多く、学会の隙間時間などに気軽に立ち寄って議論することができ、有意義な3日間を過ごすことができました。

日本体育学会への参加は、大阪体育大学で開催された第67回大会以来、2回目でした。私は、日本体育学会の最大の魅力は、その研究範囲の広さだと感じています。たとえば、大会プログラムが、体育哲学、体育史、体育社会学、体育心理学、運動生理学、バイオメカニクス、体育経営管理、発育発達、測定評価、体育方法、保健、体育科教育学、スポーツ人類学、アダプテッド・スポーツ科学、介護福祉・健康づくり、の各項目に分かれていることからその範囲の広さを感じることができます。普段の研究活動において、文献調査や議論の相手が特定の分野に偏ってしまいがちな私にとって、このような幅広い領域の研究に触れることのできる日本体育学会への参加は貴重な機会であると感じています。

今大会では新企画として「領域横断セッション」が設けられていました。この領域横断セッションは、特定のキーワードを軸にポスターセッションを行うものであり、発表する分野が専門領域にまとめられている「一般研究発表」とは対照的です。今回は“オリンピック・パラリンピック”、“トレーニング”、“大学生”がキーワードに設定されており、私は“トレーニング”のセッションに参加しました。ここでは、特に気になった2つの研究を紹介させていただきます。1つ目は、山本先生（北翔大学）

の「家庭用ビデオゲーム機のコントローラを用いた床反力計測用アプリケーションの開発」という研究です。ポスター会場には、床反力計測用アプリケーションが準備されており、実際に体験させていただくことができました。自分では直立しているつもりでも、画面上の重心は中心点から微妙にずれており少々ショックを受けましたが、このような主観と客観のずれを自覚することのできるトレーニング機器は、選手へのフィードバックに非常に有用であると感じました。2つ目は、藤井先生（名古屋大学・理化学研究所）の「機械学習による集団スポーツの選手の動きの分類・予測手法を利活用する方法の提案」という研究です。この研究では、機械学習を用いた分析によってプレーの分類や予測などが行われていました。集団スポーツでは、選手個々のどの動きがプレーの成功、あるいは失敗に繋がったのかを判断するのが難しいという特徴がありますが、このような研究が発展することによって、選手のプレーに関する客観的な評価指標の作成が期待できるのではないかと感じました。以上のように、一口に“トレーニング”と言っても、その研究対象やアプローチは様々でした。この「領域横断セッション」は幅広い領域の研究者が一堂に集う日本体育学会だからこそできる企画であり、改めてその魅力を感じられる機会となりました。

最後に、本大会の準備、運営に携わった教職員および学生の皆様のおかげで大変快適に大会期間を過ごすことができました。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

大会参加記

山田弥生子（大阪体育大学大学院）

令和元年9月10日（火）から12日（木）に慶應義塾大学日吉キャンパスにて開催された日本体育学会第70回大会に参加させて頂きました。私にとって初めての体育学会への参加・発表であり、その大会が70回という記念大会であったことを嬉しく思います。開催日程の直前の週末に台風15号が関東地方を襲い甚大な被害をもたらしました。被害に遭われた方々にお見舞い申し上げますとともに、その様な状況での開催となり、ご対応をいただいた関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。私は9日に大阪から東京に飛行機で参りましたが、機内で「万が一の場合は引き返す可能性がある」という旨のアナウンスが流れ、無事に到着した羽田空港では壁の損傷により浸水の被害を受けているのを目の当たりにし驚きを隠せませんでした。

大会3日目のポスターセッションにて「ライフスキルがメンタルヘルスにもたらす影響—体育系大学生のライフスキルと生きがい度との相関—」という内容で発表させて頂きました。大学生アスリートのメンタルヘルスとライフスキルの相関を検証した結果、メンタルヘルスとライフスキルの因子および全体との間に相関が見られ、ライフスキルを身につけることでメンタルヘルス向上につながる可能性があり現役選手へのライフスキル教育の必要があるのではないかと結論づけました。体育学会は他領域の方々からのご意見を頂戴できる貴重な機会であり、普段いただけない視点からのご意見をたくさん頂くことができました。

自らの発表以外では、口頭発表、シンポジウム、ランチョンセミナー等に参加させて頂きました。大会1日目の本部企画シンポジウム「新しい時代にふさわしいスポーツ指導者の育成と認定：体育学会の果たすべき役割」では指導教員の土屋先生のご厚意で通訳などのお手伝いをさせて頂きました。国際コーチングエクセレンス評議会（ICCE）会長であ

るJohn Bales氏と直接お話をさせて頂き、日本の部活動での現状、指導者育成について海外の最新の状況やプロフェッショナルの目線からのご意見を伺えたことが非常に貴重な経験だったと感じています。私は研究活動の傍ら、チアリーディングの指導者としてジュニアのコーチングを行っておりスポーツ協会のコーチ資格も保有しておりますが、コーチとして向き合わなければならない課題が数多くあることを改めて実感しました。また、私の研究テーマであるライフスキルとコーチングは密接に関連しているため研究にもつながる内容で、本シンポジウムでの学びは非常に有意義なものでした。

今回の新企画である領域横断セッションでは、様々な領域の発表が一つの会場にあることの新鮮さもさることながら、冒頭の発表者の方々プレゼンテーションが非常に印象的でした。そうした興味を持ちやすい導入がその後の議論が活発に行われたことにつながったのではないかと感じました。

2020年4月から博士後期課程に進学し引き続き大阪体育大学大学院にて研究を続けさせて頂くことになりました。来年は2020横浜スポーツ学術会議が行われるので、そこで新たなご意見やご指摘がいただける様、これからも研究に取り組んで参りたいと思います。

日本体育学会に参加して

霜島駿太（筑波大学大学院）

はじめに

2019年9月中旬に慶応義塾大学日吉キャンパスにて開催された日本体育学会第70回大会に参加しました。令和初の今大会は、全日程が晴天のため過ごしやすかったです。今大会、私は新たな気持ちで参加しました。なぜなら、博士課程へ進学して初の大会だったからです。体育に情熱を注ぐ研究者の方々と熱く語り合える機会を楽しみに発表準備を進めてきました。そして、修士課程で発表した昨年よりも、質の高い発表をすることを目標に臨みました。

研究発表

今大会も前回大会に続き、ポスター発表をしました。研究題目は「性格特性的強みの正義がスポーツ行動規範に及ぼす影響」でした。私の研究題目に興味をもち、発表を聞きに来てくれた方がいた時の嬉しさは今でも覚えています。嬉しいだけではなく、発表を聞きに来てくれた方との議論の中で、新たな研究の視点に気づき、有意義な時間になりました。ポスター発表の強みは研究データを掲載し、それらをもとにじっくりと議論できることだと感じました。貴重な意見をいただくことができ、大変嬉しく思っております。議論してくれた皆様、ありがとうございました。この場をお借りして、お礼を申し上げます。今後も継続して体育学会で発表する目標があります。毎年の体育学会での交流を楽しみに研究を発展させていきたいです。

体育心理学専門領域キーノート

本大会も非常に興味深い企画が準備され、新たな知識の習得につながりました。特に、キーノートレクチャー「中途障害に伴う自己の喪失と再構築のストーリー：パラアスリートの語りから（内田若希先生）」は貴重な学びとなりました。パラアスリートの語りからライフストーリーを追って質的に研究

するナラティブ研究の面白さと意義が伝わってきました。ライフストーリーを聞くことで、個人の内面や現実を主観的に振り返るナラティブアプローチに興味を持ちました。質的研究に挑戦したい気持ちに駆られたことを覚えています。印象的であった内容は、障害者として生きる自己の葛藤です。障害者と健常者の二極化により、障害者はレッテルを貼られて生きていることを再確認しました。健常者が急に障害者となると、周囲の視線に対する羞恥心が芽生えるという話は重みがありました。長年に渡り、パラアスリートに寄り添い続けてきた方の言葉は深いと感じました。自分が障害者となった事実を受け入れることは、思い描いていた未来の喪失となり、絶望することは想像できます。しかし、想像できるだけでその人に寄り添うことは非常に難しいことが予想できます。寄り添うためには、障害者の語りをライフストーリーを追って質的に研究することが必要だと強く感じました。パラアスリートへの心理的サポートへの注目度が高まっているように感じられる昨今ですが、アプローチ方法にも着目していきます。今後の発展から目が離せません。

最後に

この度は、日本体育学会第70回大会の参加助成に採択いただき、誠にありがとうございました。選考して下さった先生方に厚く感謝申し上げます。今回の参加助成により発表のクオリティを向上させることができ、充実した学会となりました。今後もこのような制度を続けていただけると心強いです。引き続きよろしくごお願い致します。

日本体育学会に参加して

松岡悠太（法政大学大学院）

9月10日から9月12日にかけて、第70回日本体育学会が慶応義塾大学日吉キャンパスにて開催されました。首都圏での開催という事で非常に多くの方が来場され、大いに盛り上がりを見せた学会となりました。

私は、12日に行われましたポスター発表2にて「中学生サッカー選手のパーソナリティに関する検討」という演題で発表させていただきました。本研究は、指導者が考えるポジション毎のパーソナリティについて質的に分析することを目的に、指導者3名にインタビュー調査を行い、逐語記録を基にKJ法を用いて分析を施すというものでした。ポジションを、FW・OH（オフENSIBフーフ）・SH（サイドフーフ）・CH（セントラルフーフ）・CB（センターバック）・SB（サイドバック）・GKの7つに分類し、エゴグラム5つの自我状態の立場から分析しました。その結果、FWは積極性に基づくFCの自我状態が、OHは創造性や他者配慮、冷静沈着に基づくFC・NP・Aの自我状態が、SHは積極性に基づくFCの自我状態が、CHは他者配慮に基づくNPの自我状態が、CBは責任感やリーダーシップに基づくCPの自我状態が、SBは積極性に基づくFCの自我状態が、GKは責任感に基づくCPの自我状態が、それぞれ抽出されました。

ポジションが決められている集団競技（サッカー・ラグビーなど）において、選手のポジションを決める作業は、戦術や技術を指導する事と同様に指導者にとって非常に重要なことであり、選手の体格や運動能力だけで決めてしまうのは安易であると私は考えています。選手が持っている力を引き出すためには、より多様な視点からポジションを決める必要があると思い、パーソナリティに着目しました。私の発表に興味を持っていただき、質問に来られた方のほとんどは実際に指導の現場を持っておられる方で、サッカーだけではなく他の競技の方も来ていただき、非常に有意義なディスカッションをすること

ことができました。やはり、私自身もそうなのですが、現場で指導をしていると選手のパフォーマンスや体格など目に見えるものだけで判断をし、ポジションを決めてしまうという事が多々あります。その中で、目に見えない部分であるパーソナリティに着目して、興味深いといった意見や、今後の指導の参考にしたいという意見をいただくことができました。ただ、この結果だけでポジションを当てはめるのは、どうなのかという意見もいただきました。今後も指導者として活動していく中で、ポジションの決定や選手のポジション変更を判断する際の引き出しの一つを作るという認識で今後の研究を進めていきたいと考えております。

ポスター発表は、比較的時間に余裕があるため、深く互いに納得するまで意見交換ができる点や、気軽にお話できる点が可能です。今回の発表でも、多くのフロアの方々から貴重なご意見をいただくことができ、有意義な学会となりました。

またこの度、学会発表支援金を採択させていただきました。特に学生の身分である私にとって今後の研究活動の貴重な費用となりました。今後もぜひこのような制度を続けてほしいと思いました。

最後になりましたが、学会開催にご尽力いただきました慶応義塾大学の先生方や学生の皆様、企画頂いた関係者の皆様に御礼申し上げます。

日本体育学会に参加して

黒田貴稔（びわこ成蹊スポーツ大学大学院）

今回の第70回日本体育学会は二回目の参加でありました。昨年よりも少し着慣れたスーツで見知った顔ぶれをみると、初めての学会参加からもう一年も経ったのだと時の流れを感じました。

今回、「陸上競技選手へのメンタルコーチングに関する質的研究」という題目でポスター発表をさせていただきました。選手との一対一形式での対話をメンタルコーチングとして位置づけ、陸上競技選手に質的にアプローチしました。本発表では2名の対象者の内、1名の事例を紹介致しました。結果、①他者と繋がりたいと強く思う②自身の記録を他者との距離感の物差しにしてしまう③競技の感覚と他者との関わり方がわからなくなる④メンタルコーチングによって一人で悩まなくなる⑤今やるべきことを考えられる⑥他者との関わり方を主体的に選択できる⑦競技に打ち込む⑧他者との繋がりを感ぜられるという8つの心理的変容を確認することができました。タイムや距離、高さを競う陸上競技では、記録はその選手が選手であるための生命線であると言えます。その記録を追い求めるがゆえに記録第一主義となり、その記録を他者との関わりの中で物差しにしてしまうことは陸上競技選手ならではの悩みといえるかもしれません。

本研究を発表するにあたり、「私の研究に興味を持ってくれる人はいるのだろうか」と不安に苛まれていましたが、関心を抱いてくれる人は多く、「こういった研究はもっと世に出して欲しい」というありがたいお言葉までいただくことができ、自分の研究に自信を持つことが出来ました。また、「陸上競技選手ならではの部分はどこか」「他者との関わりがうまく行っていないときにどのような声掛けをしたのか」等の質問を頂きました。本発表の目的は、上手いかわからない選手に対してどういった声掛けや関わりをすればいいのかといった方法論の話ではなく、この選手はなぜそのようなことで悩むのか、な

ぜ今それを語るのか、という選手に対する理解を深めることが目的です。選手の悩みが多様化していると言われている今、個人に寄り添い、どのようなことで悩んでいるのかという知見の積み重ねが必要になってくると考えます。本発表に関心をもって頂いた方は現場で指導をしている方が多く、現場に近い方とディスカッションできたことで自分の視点が凝り固まっていること、現場で求められているものに気付くことが出来ました。多くの方と意見を交わすことが何より研究を深めていくことが出来ることだと思いますので、今後も積極的に他者と関わり、自分の研究をグレードアップさせていきたいと考えております。今回、ご指導を頂いた先生方や意見を頂いた参加者の皆様、本大会の開催に尽力されました全ての方々に感謝の意を表するとともに、今後の研究活動に活かして、さらに質の高い研究が出来るよう精進したいと思います。

最後になりますが、昨年に引き続き参加助成に採択していただき、誠にありがとうございました。学会参加にあたり経済的に援助していただくことができ、発表に対するモチベーションを高く持つことができました。学会は、多くの方たちに意見を貰える貴重な機会です。今回発表が出来たのも、多くの方とディスカッションが出来たのも、この助成金があったからです。今後も、この助成制度を継続していただけたらと思います。この度は採択していただき、誠にありがとうございました。

日本体育学会に参加して

藤本雄太（びわこ成蹊スポーツ大学大学院）

今回、第70回日本体育学会に参加し、口頭発表をさせていただきました。私自身、このような学会に参加することが初めてで、学会はどのような雰囲気で行うのだろうか、何人の方が発表を見に来てくれるのか、うまく発表できるのか、など参加する前から、不安が募り、緊張しておりました。

今回、「どのように再発の恐怖と向き合うのか」というテーマで発表させていただきました。スポーツ傷害による再発の恐怖を感じることで、リハビリに主体的に取り組めないなどの社会的問題を背景に、質的研究法を用いて分析を行いました。

その結果として、本研究では、Fig.1「再発の恐怖と向き合い克服していくことで主体性を獲得していくプロセス」を作成し、「どのように再発の恐怖と向き合うのか」というRQに対して、「長期離脱者は受傷後、現実から逃避し自己を見失い、周囲に悩みを吐き出すことで現実と向き合わざるを得なくなる。その結果、再発の恐怖と直面するが、復帰に向けて自ら行動していないと気づくことで、リハビリへ主体的に取り組むようになる」という仮説的知見を導き出しました。

発表の際、「受傷者の競技レベルの差で、再発の恐怖と向き合う過程に違いがあるのか」「競技離脱をした時期の長さにより、向き合い方が変わるのか」などたくさんのご質問をいただきました。

今回、私が言いたかったのは、受傷アスリートの背景の違いによる再発の恐怖との向き合い方を明らかにするという話ではなく、「再発の恐怖と向き合い、克服するために、何度も自己を見失い、悩み、徒勞することが必要である」ということです。

スポーツ医科学領域での先行研究では、再発の恐怖を軽減することで、競技復帰に向けて円滑なリハビリテーションを行うことができると考えられますが、再発の恐怖と向き合い、克服することにより、復帰に向けて主体性を獲得するという、精神的成長

につながることを、本研究で示すことができたと思います。

発表後も、沢山の先生方からお話を伺い、積極的にディスカッションを行うことが出来ました。その中でも、研究を行う上で、受傷アスリートだけの目線だけではなく、コーチやトレーナーの目線に立ってフィードバックを考察する必要があることや、情報提供者の細かい設定を行う必要があるなど、今後の研究活動にも活かすことができる様々な課題を得ることが出来ました。

しかし、今回の反省点としまして、発表に対する準備不足が挙げられます。口頭発表に向けて、何度もプレゼンテーションの練習を行うべきであり、資料作りなども早期に行なっていればと後悔しております。特に、プレゼンテーションでは、沢山の先生方の前で発表をすることから、緊張し、あがってしまうことも想定できたはずですが、そこに対する準備もできていませんでした。この経験を得て良かったと言えるように、今後の研究活動に励みたいと思います。

最後になりますが、本大会において参加助成に採択して頂いたことは大変光栄で、とてもありがたい制度でした。学会に参加することで、多くの先生方と交流をすることができ、新たな視点や、考え方を学ぶことができました。このような制度で我々学生の学会参加への後押しをして頂ける事は大変有難く、ぜひ今後とも続けていただきたく思います。採択して頂き誠にありがとうございました。

日本体育学会に参加して

足立廉太郎（広島大学大学院）

2019年9月10～12日にかけて慶應義塾大学日吉キャンパスにて、日本体育学会第70回大会が開催されました。今大会では、新企画として領域横断セッションが設けられました。この企画は、様々な研究課題を領域を超えた場に集め討論するとともに、会員相互の新たな交流の場とすることを狙いとされています。私の研究について体育心理学領域だけでなく、他分野の先生方と議論させていただきたいと考え、領域横断セッションのトレーニング分野にて発表させていただきました。

私は、「高校ラグビーチームにおけるメンタルトレーニングの実践的研究」というテーマで発表しました。メンタルトレーニングに関する多くの実践的研究は、既存の包括的なプログラムに沿って心理的スキルを満遍なく強化することを狙った方法により行われています。しかし、ラグビーチームを対象に、選手の心理的問題を帰納的に分析し、それに基づいて構成したメンタルトレーニングの効果を調べた研究はありません。そこで、本研究は、高校ラグビー選手の心理的問題やメンタルトレーニングに対するニーズを明らかにすること（研究1）、及び研究1で明らかになった心理的問題やニーズを反映させたメンタルトレーニングの効果を検証すること（研究2）を目的としました。

研究1では、K高校ラグビー部9名を対象とし、半構造化面接、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた帰納的分析を行いました。分析の結果、高校ラグビー選手の心理的問題やメンタルトレーニングに対するニーズはスポーツ場面だけでなく、日常生活場面にも及び、多様な場面を踏まえた多角的なプログラムが必要であるということが示唆されました。また、得られたニーズからセルフトークなどのメンタルトレーニングプログラムを決定しました。

研究2では、介入群（K高校10名）に加え、統制群（I高校11名）、ボランティア群（A高校12名）

実験中に発生した西日本豪雨により10日ほど部活動を行えず、その間に実施したボランティア活動が情動知能に及ぼす影響を考慮した)を設定し、各群シーズン前後で心理的競技能力診断検査と情動知能尺度を測定しました。その結果、介入群において心理的競技能力は向上しませんが、危機管理、人材活用力などの情動知能が向上し、情動知能に対するメンタルトレーニングの有効性が示唆されました。

領域横断セッションでの発表によって、体育心理学領域以外の多くの先生方にメンタルトレーニングの実践研究に興味を持っていただき、立場を超えた多様な議論を行うことができました。特に、現場で選手をサポートしていらっしゃる先生方とは、本研究に対する議論を通して、心理側への疑問や要望、双方の立場の理解など、今後現場で選手をサポートを行う上で必要な多角的な視点を共有することができ、非常に良い経験となりました。体育・スポーツに対して分野を超えた議論が可能な企画であるからこそ、得られた学びだと考えております。

最後になりますが、学会参加助成に採択していただき、衷心より御礼申し上げます。また、大会組織委員会の先生方、会場運営を担当してくださったスタッフの皆様、体育心理学専門領域の先生方、発表にお越しいただいた先生方にも重ねて御礼申し上げます。

日本体育学会に参加して

柴崎雛子（筑波大学大学院）

この度、令和元年9月に慶應義塾大学にて開催された日本体育学会第70回大会に参加させていただきました。学会参加人数も非常に多く、大規模な大会でしたが円滑な運営をしてくださったスタッフの皆様から心から感謝を申し上げます。自らのポスター発表を筆頭に、諸先生方の演題・各シンポジウム等を通して様々な知見を得ることができました。

本学会は大学院に入学したばかりの私にとって初めての参加・発表を行った大会であり、非常に印象深いものとなりました。『学会』とは深い知識や見解をもつ学生や先生方が参加するものであると感じていたため、まだ未熟な私が参加するだけでなく発表をすることになるなど想像もしていませんでした。非常に緊張をしながら当日を迎えましたが、実際に会場に足を踏み入れてみるとスポーツに関して興味や疑問をもつ人々がたくさん集まり各所で活発な議論が交わされており、非常に開かれた場所だと感じました。更に本大会はスポーツに関する幅広い分野の研究が集まっていたため広い視点から多角的にスポーツを考える機会も多く、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

三日間の日程を通して様々な企画に参加させていただいたのですが、体育方法分野の『球技のコーチングに関する一般理論の構築』というシンポジウムが一番印象に残っております。現在女子ラクロス部のコーチを行っているため、日々の現場活動に生かせる気づきをたくさん感じたシンポジウムでした。「基礎的な技術の反復練習は必要だが、試合の中で発揮できない技術には意味がない」という観点からゲーム中心の練習の意義に関して先生方が討論されていたことが非常に印象的でした。今回の討議テーマである球技スポーツの試合は多くが流動的であり、その場に応じた柔軟な対応や環境変化への安定性が求められます。このようなゲーム特性に合わせた練習を展開すべきであるという考えは非常に勉強

になりました。

また、本大会では自らの研究に関してポスター発表をさせていただきました。まだ経験も知識も薄い学生である私のポスター発表にも想像以上に多くの方が足をとめてくださりとても嬉しかったです。自分の研究を端的にまとめて初見の方に伝える難しさと、研究に関して様々な方と議論をする楽しさを感じることができた貴重な経験となりました。それぞれの立場・考え方から頂いた質問や意見は普段学校内で意見を交わしているだけでは見落とししていた視点も含まれており、非常に勉強になりました。研究テーマはラクロスの捕球技能に関して熟練者と非熟練者の違いを検討したものでした。捕球位置までの軌跡や捕球位置が熟練度により異なることが明らかになったのですが、同じく運動学習に関して研究をされている先生方から頂いた質問は自分の研究意義や目的を考えさせられるものでした。なぜこのような違いが生まれているのか、説明をしながら改めて考えることで研究を深めていくヒントを得ることができたように感じます。今後は動作の分析にとどまらず、学習に関して研究を深めていきたいと考えておりますので、今回の経験は非常に有意義なものとなりました。また、私が扱っているラクロスというスポーツはマイナースポーツであり日本での研究数も非常に少ないのですが、同じくラクロスを題材として研究したいと思っている方とお会いすることもできて研究への励みとなりました。この大規模な大会で多くの交流をすることができたことは私にとって大きな収穫でした。

最後になりましたが、改めましてこの度は大会での発表に関し支援を頂き誠にありがとうございます。今回の発表を通じて得た知見を今後の研究に生かし、研究者として今後も精進していきたいと思っております。

日本体育学会に参加して

板谷 隼（筑波大学大学院）

この度、令和元年9月に慶應義塾大学にて開催された日本体育学会第70回大会に参加させていただきました。多くの参加者のある大規模な大会であり、円滑な運営をしてくださったスタッフの皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。各先生方の演題に加え、シンポジウムやランチョンセミナーといったプログラムを通して多くの学びや交流を得ることができました。

私にとって、今回の大会は思い出深いものになると思います。実は、「学会」というものに参加するのが初めてで、右も左も分らぬまま先生や先輩方のご協力を得て抄録を提出し、初めてのポスター発表をさせていただくことができました。大会当日に会場に足を踏み入れますと、想像をはるかに超える大会の規模に熱を感じました。会場内のいたるところで、研究成果の報告とディスカッションがあり、知見を深める参加者の様子に刺激を受けました。私自身のポスター発表の際には、多くの方に足を止めていただくことができました。体育心理学や体育科教育を専門とされる方、スポーツコーチングの方などと、自身の研究課題である「スポーツ鬼ごっことサッカー（侵入型球技）の類似点」についてディスカッションをさせていただいたり、研究者として未熟極まりない立場ですので、研究の方法について助言いただけたことは非常にありがたいことでした。また、同じように鬼ごっこを題材に扱う研究者の方と出会うことができたのは嬉しく思っています。大会終了後も研究についてご連絡させていただくことがあり、大規模かつ参加者の交流が盛んなこの体育学会での大きな収穫と感じております。

印象に残っているプログラムは、慶應義塾大学の神武直彦先生によるランチョンセミナー「システム×デザイン思考で街や人を元気に～トップアスリートからグラスルーツまで～」です。テクノロジーを駆使して体育・スポーツをより、楽しく地域に溶

け込ませていく取り組みや、その一つとしての小学校でのラグビーの授業の事例等、非常に興味深くお話を聞いていました。日ごろ研究者が深め続けている知見を、例えばグラスルーツといった身の回りの日常に還元していく時には、システムやデザインといったものとの組み合わせ、各分野の融合といった体育・スポーツ科学の諸分野の間での、そしてさらには芸術や医療や歴史、文化といった学問領域を含めた学際的な発想が必要になっていくことを感じ取りました。

また、今大会でこれまでお世話になった多くの先生方、先輩方に再会できたというのも印象深いことの一つでした。私が筑波大学で過ごす間に、先輩方中心にお世話になった方の中にはつくばから出られてそれっきりの方もいらっしゃり、そういった方とこの場でお会いして近況報告ができたことは非常に嬉しいことでした。同じ学問をする仲間として、まだまだ教えていただくことばかりなのですが、早く双方に実りのある議論ができるように自身の知見を深め、一端の研究者として胸を張れるよう頑張りたいと思います。

この度は、学会大会での発表に関して体育心理学専門領域からご支援を頂いたことに感謝申し上げます。このような制度は、大学院生にとって非常にありがたいと思います。初めての体育学会大会の参加は、非常に思い出深いものになりました。次年度以降もより大きな学びを受け取れるよう、自身の研究を深めていきたいと思っています。

II. 研究会の活動報告

スポーツ社会心理学研究会 活動報告

内田若希（九州大学）

2019年度は、九州スポーツ心理学会第33回大会2日目に、「2020年の先を見据えたスポーツを通じたヒトと社会の成熟」というテーマのRTDを開催する予定でした（九州スポーツ心理学会との合同企画）。しかし、新型コロナウイルスの感染が拡大している状況に鑑みて、現地での学会開催が取りやめとなり、ポスター発表のみのインターネット開催に変更となりました。このため、予定していたRTDを開催することは叶いませんでしたが、企画していた内容と今後の予定（野望?）について、以下にまとめたいと思います。

わが国は、今夏に東京オリンピック・パラリンピックを控え（こちらも新型コロナウイルスの影響で開催が懸念されていますが…）、スポーツの社会的意義が問われています。文部科学省も、スポーツが身体的・心理的側面の健全な発達を促すだけでなく、活力に満ちた社会の形成や多様性・公正さを尊重する社会の成熟へ貢献することを、スポーツの価値として述べています。しかしながら、この「多様性・公正さを尊重する社会の成熟」に、スポーツ科学はどれくらい貢献できているのでしょうか。スポーツ科学領域における議論の中心は、いまだ「メインストリームの人々（スポーツが得意な人、スポーツが得意な身体を有する人、心身をめぐり困難と無縁の人）」ではないのでしょうか。言い換えれば、「メインストリームの外側の人々」が置き去りにされているように思うのです。

私は現職において、心身に何らかの困難を抱える学生の運動・スポーツの授業担当や支援に携わっています。自戒の念を込めて書かせていただくと、心身の障害・疾病のみならず、運動困難・不器用さ（協調性運動発達障害を含む）、性をめぐり問題に関して、大学教員の認識の低さ・甘さを痛感することも少なくありません。心身に何らかの困難を抱える学生たちにとって、運動・スポーツは「自分たちから

遠いもの」「自分たちには無関係のもの」「自分たちの居場所がないもの」であることを、今こそ再考する必要があると考えています。このような個人的な経験則と思いかから、今回のRTDの企画に至った次第です。

ありがたいことに、九州スポーツ心理学会の企画委員会ならびにスポーツ社会心理学研究会から、「企画者の思いが実現するように、好きにやって良いよ」というお言葉をいただきました（正確には、もう少しオフィシャルな言い回しでしたが）。そこで、運動・スポーツ場面における「メインストリームの外側」に眼差しを向けてきた3名をパネリストに迎えるべく、交渉と準備を重ねてきました。

この3名のパネリストについても、簡単にご紹介しておきます。まず、眞野豊先生（日本学術振興会特別研究員PD・広島修道大学）にはLGBTブームの光と影について、中村珍晴先生（神戸学院大学）にはパラリンピックの功罪について、話題提供をしていただくことになっていました。また、森司朗先生（鹿屋体育大学）からは、自閉症児の療育キャンプを題材に、話題提供をしていただく予定でした。手前味噌ですが、本当に密度が濃く、熱量の高いRTDになるはずでした。

このRTDをこのままお蔵入りさせたくない…それが、私の現在の希望（野望）です。というわけで、この企画を次回の九州スポーツ心理学会（もしくは来年度の日本スポーツ心理学会）のRTDに持ち込むべく、すでに計画を練っているところです。幸いなことに、3名の先生方が私の希望（野望）にご賛同くださっていますので、ぜひ楽しみにお待ちしております。ありがとうございます。

スポーツ社会心理学研究会事務局

杉山佳生（九州大学大学院人間環境学研究院）

sugiyama@ihs.kyushu-u.ac.jp

メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会 活動報告

高妻容一（東海大学）

この研究会は、国際メンタルトレーニング学会（ISMTE）と国際応用スポーツ心理学会（AASP）をモデルに、1994年にスタートし、現場での実践を目的とした情報交換会を全国各地で開催している。本研究会は、現場での実践・競技力向上を目的に情報交換の場所を提供している。具体的には、スポーツメンタルトレーニング指導士・上級指導士やその資格を目指す学生たちが情報・話題の提供をし、その情報を参加している選手や指導者が現場で実践してもらっている。研究会で得た情報を持ち帰り、現場で実践してもらい、その結果をまた研究会で報告するという理論（研究）と実践（現場）のキャッチボールを目的としている。

2019年度は、東海大学研究会が毎週1回の開催をし、さらに関東地区、関西地区、愛知県、栃木県の各研究会が毎月1回の開催をした。関西地区では、7月に2日間講習会（200名以上）、青森支部会では8月に2日間講習会（100名以上）を実施し、北海道支部会では、4月・12月に帯広地区講習会（200名以上）と6月・10月に札幌地区講習会（各100名以上）を実施した。ここでは、上級指導士による競技力向上を目的とした現場で活用できる心理的スキルの講義や実技の実践が行われた。

情報収集活動としては、アメリカのポートランドで開催された国際応用スポーツ心理学会（AASP）にも数名が参加し、世界的な情報の収集をし、その報告を研究会で行った。この学会では、多くのキーノートレクチャー・シンポジウム・ワークショップ・口頭発表・ポスター発表が行われた。この学会で報告されたオリンピックやプロチーム、さらには軍隊におけるスポーツ心理学者たちの心理的サポートの実践例が紹介された。さらに、この年も一昨年急死したメジャーリーグのエンジェルスやシカゴカブスの心理的サポートを実施したケン・ラビザ博士の追悼シンポジウムなどが行われた。またアメリカオリ

ンピック女子バレーチームのヘッドコーチの講演などが行われ、本人が代表チームで実践したメンタルトレーニングの内容や東京2020オリンピックに向けた準備や強化の報告が行われた。

一方、毎月開催される関東地区や毎週開催の東海大学研究会では、自己紹介を兼ねた情報交換が30分程度行われ、その後は参加者が現場での問題点やメンタルトレーニングの実践例やその効果等を持ち寄り報告し、ディスカッションをしている。特に、ある高校女子バスケットボールチームのメンタル面強化の取り組みが映像を使いながら紹介され、その方法等についてディスカッションが行われた。最終的に、このチームが初めての県大会優勝までの取り組みなども報告された。また主催者側からの話題提供が行われ、同時にいくつかの心理的スキルや実践例に対してディスカッションが行われている。さらに、スポーツメンタルトレーニング上級指導士の資格取得者からの話題提供や現場での実践例が報告されている。加えて、参加者の選手やコーチからの報告や話題提供、映像による試合や練習場面での報告に対して、グループを作りディスカッションなどが盛んに実施している。研究会後は、懇親会等で参加者同士によるさらなる情報交換が毎回行われている。

さらに、本研究会は、現場のコーチや選手の参加が多いため現場での実践、競技力向上を目的とした情報交換（研究・理論と現場・実践のキャッチボール）が盛んに行われている。特に、東海大学スポーツサポート研究会：メンタルトレーニング部門の学生たちが自分の研修をしているチームでの取り組みを紹介し、会場の参加者から多くの意見やアドバイスをもらい、自分たちの心理的サポートの向上に努めている。各支部会でも、各支部長を中心に、独自の取り組みが行われ、現場の選手やコーチたちから多くの支持を受けている。

運動学習研究会 活動報告

鈴木啓央（龍谷大学）

第28回運動学習研究会は、2019年8月23、24日の2日間にわたり龍谷大学（大宮学舎）において開催されました。本研究会は、比較的少人数の規模で開催され、発表時間内での質疑応答はもとより、時間外での密な議論が活発である点が本研究会の特徴です。

今年度の研究会では、類似した分野の研究会が同日に開催されていたこともあり、参加者は12名、発表者は7名と、例年と比較すると小規模な研究会でした。発表者の発表時間は30分から1時間でしたが、時間的にかなり余裕をもったスケジュールを組んだことにより、30分の発表であったとしても、1時間以上にわたる議論が行われる発表が多くありました。

発表の内容は、個人技能の学習や、対人競技のダ

イナミクス、スポーツ用具の開発に至るまで多岐にわたるものでありましたが、議論する十分な時間が用意されていたこともあり、研究結果についてはもとより、研究目的、分析手法、今後の発展に至るまで、非常に活発な議論が展開されていました。

2020年度の研究会の開催時期および場所はまだ未定ですが、運動学習研究会のホームページに随時開催案内が掲載されます。報告者も大学院時代より本研究会にはほぼ毎年参加しており、特に大学院時代には多くの先生方からのご助言によって研究が発展していった記憶があります。ベテランの先生方はもちろんですが、多くの大学院生が本研究会に参加し、多くの若く新しい知見を生み出す研究会として今後も長く継続していくことを願っています。



発表者と発表演題（発表順）

演題	発表者	所属
投球動作が打者の球速知覚及び打撃動作に与える影響	高御堂 良太	名古屋大学大学院
ボードスポーツからみた学習ダイナミクス	鈴木 啓央	龍谷大学
三者連結の練習道具は対人自由度を操作する	横山 慶子	名古屋大学
バットの特性に対する熟練選手の感覚	田淵 規之	ミズノ株式会社
アートの身体運動科学	工藤 和俊	東京大学
剣玉技能の習得過程	平川 武仁	大阪体育大学
代替混合力学系によるテニス選手の動きに残る履歴現象	山本 裕二	名古屋大学

臨床スポーツ心理学研究会 活動報告

中込四郎 (国士舘大学)

本会の主な活動は今のところ、年1回の研究会開催そしてニュースレターの発刊です。ここでは、令和元年8月30、31日に行われた研究会(第6回臨床スポーツ心理学研究会)の内容紹介を通して、私どもの研究会活動の様子を伝えたいと思います。

第6回臨床スポーツ心理学研究会のプログラムは次の通りでした。(以下、敬称略)

8月30日<司会:岸 順治(岐阜協立大学)>

① 13:00~15:30:事例検討

事例提供者:山崎史恵(新潟医療福祉大学)

題目:「自傷行為を続けながら競技活動を行った女子学生アスリートの事例」

指定討論者:中込四郎(国士舘大学)

② 16:00~17:30:レクチャー

講師:山本昌輝(立命館大学)

題目:「心理面接(心理療法・カウンセリングにおける“こころとからだ”を考える)

<18:30~20:30:情報交換会>

8月31日<司会:岸 順治(岐阜協立大学)>

③ 9:00~11:30:事例検討

事例提供者:米丸健太(岐阜県立中濃特別支援学校)

題目:『気持ちの浮き沈みが激しい』と訴え来談したアスリートとの面接」

指定討論者:鈴木 壯(中部学院大学)

④ 11:30~12:10:話題提供

話題提供者:中込四郎(国士舘大学):

題目:15th FEPSACに参加してーClinical Sport Psychologyのセッションを中心にー

以下では、これらのプログラムに基づく研修内容について若干の説明をさせていただきますが、守秘義務や報告者の主観(印象的な内容)を交えることから、内容に偏りのあることを断っておきます。

山崎先生の事例は、「ずっと自分自身がわからなく今もずっとさまよっている状態で・・・」との主訴から相談が始まり、本報告のタイトルからも窺われるように、自傷行為や希死念慮が認められたことから、精神科治療と連携しながらの困難な心理療法事例でした。クライアントは、治療者である山崎先生の前で幼少期からのエピソードを語りながら、自己

理解を深め、そして自身の感覚を取り戻し、自身の思いや感覚に信頼を寄せられるようになっていくといった変化がもたらされ、それは同時に、クライアントの競技復帰につながっていきました。

米丸先生より報告されたもう一つの事例は、気分の浮き沈みが激しく、パフォーマンス発揮での安定性に欠けていた事例でした。こうしたパフォーマンスレベルでの特徴は、面接の中でのクライアントの語りにおいてもつながりの悪さが感じられるものでした。相談初期に実施された描画(風景構成法)作品においては、逆に、各アイテム間でのつながりを強調(意図しよう)するために、付加的に橋、道、階段等を描き加えていたことともつながるように思われました。米丸先生は、クライアントが相談の中でしばしばストーリーの面白さを強調しながら語る、ゲームについて話題を共有して行かれる中、クライアントは、日々の体験の新たな意味づけやつながりを見出し、パフォーマンスの安定もそのことに同期することになりました。

レクチャーを引き受けていただいた山本先生には、一般臨床の立場から、“こころとからだ”について語っていただきました。参加者の多くは、先生のお話をスポーツ臨床での経験と重ね合わせながら受け止めていました。先生は“体”を入れ物と捉え、こころの動きと身体像が同時に交流しており、身体像を関わり窓口としてこころの動きに迫ることができること。そのためにはクライアントの語りに対して、肉づけを図りながら(そこに込められた意味を考えながら)、クライアントの語りを前にした治療者自身の身体像への感受性を高めながら(共同体験的つながり)聴く必要がある、と述べられました。

プログラムの最後は、中込が先ごろミュンスター(ドイツ)で行われた第15回ヨーロッパスポーツ心理学会大会(2019/7/15~20)について、Clinical Sport Psychology関連のセッションの紹介を中心に、話題提供を行いました。

次年度もまた、日本の真ん中に位置する岐阜での第7回研究会開催を約束し、お開きとなりました。

スポーツ動機づけ研究会 活動報告

北村勝朗（日本大学）

第17回スポーツ動機づけ研究会は、横浜市スポーツ医科学センターを会場として、2019年5月18日（土）～19日（日）の二日間に渡り開催されました。全国各地から動機づけに関心を持つ研究者49名が集まり、活発な意見交換が行われました。同じ会場の日産スタジアムではサッカーJ1の熱い試合も行われていましたが、その熱気にも劣らない熱い議論が展開されました。研究会代表の西田保先生（愛知学院大学）と第17回研究会幹事の渋谷崇行先生（桐蔭横浜大学）を中心とし、以下のようなプログラム構成（口頭発表4件、シンポジウム1件、研究室紹介4大学）により、スポーツ動機づけに関する幅広い研究交流が展開されました。

5月18日（土）

- ・大学競技選手は何を誇りに感じるのか？：対象から誇りの構造を探る（近藤みどり、大阪体育大学大学院）
- ・スポーツスキル修正プロセスのモデル化：指導現場で活用するために（養内豊、北星学園大学）
- ・ITを用いた心理的コンディショニングとパフォーマンスの検討（磯貝浩久、九州産業大学）
- ・研究室紹介
 - －桐蔭横浜大学（渋谷研究室）
 - －大阪体育大学（菅生研究室）
 - －静岡大学（杉山研究室）
 - －順天堂大学（柴田・川田研究室）
- ・Welcome party（みなとみらい）

5月19日（日）

- ・児童期におけるスポーツコンピテンスとペアレンティング：短期縦断データを用いた相互影響分析（梅崎高行、甲南女子大学）
- ・シンポジウム：トップアスリートの動機づけの秘密に迫る！
 - －司会：西田保（愛知学院大学）
 - －エンパワリングコーチングに基づくスポーツ動機づけ面接法の実践：（藤田勉、鹿児島大学）
 - －トップアスリートの動機づけ継続に関わる資質

GRITについて（杉山卓也、静岡大学）

- －トップのトップを極める心理：動機づけと言えるのか？（北村勝朗、日本大学）
- －動機づけ研究からトップアスリートのサポートを考える（養内豊、北星学園大学）

二日間のプログラムの中で、幅広いトピックスが取り上げられ、多様な形式により、多角的にスポーツ動機づけやスポーツ心理学について考える場となり、有益な時間を過ごすことができました。本研究会はスポーツ動機づけを軸とし、幅広い年齢、多様な学問ベース、異なる研究方法論、理論と実践など、多種多様な物の見方、考え方、感じ方、アプローチを参加者が持ち寄って刺激し合う場であると思います。一つひとつの研究発表に時間をかけてじっくり議論をすることで、研究テーマに関する深い理解や新たな発想の獲得、そして研究促進のための手がかりといった前に進むためのヒントを得る場であることを大切にしています。自由で生産的な意見交換がなされる雰囲気になっています。特に今回は、参加者が取り組んでいる研究に関する情報交換と同時に、大学院生の視点からの研究室活動の紹介や情報交換が活発になされていた光景が印象的でした。

初日の夜には、横浜のみなとみらいのすばらしい夜景を眺めながら懇親会が行われ、昼間の会議室とはまた違ったディスカッションが見られました。

次年度は神戸市を候補として第18回動機づけ研究会が開催される予定です。スポーツ動機づけに興味関心をもたれる皆さまの参加を期待しています。



Ⅲ. 研究室紹介

研究室紹介 福山平成大学福祉健康学部健康スポーツ科学科 スポーツ心理学研究室

藤本太陽（福山平成大学）

大学概要

福山平成大学は、1994年に広島県福山市に創設されました。本学は福山市や近隣市町村などの協力を得て「公私協力方式」により設立されたことから、福山市を中心とした備後地域の発展に貢献する人材育成を第一の目的として教育を行っております。開学当初は経営学部のための単科大学でしたが、現在は経営学部、福祉健康学部、看護学部の3学部と大学院、専攻科が設置され、幅広く学ぶことができます。現在の学生数については、学部および大学院を合わせると約1200名の学生が在籍しています。また、クラブやサークル活動などの課外活動にも積極的に取り組んでいます。近年のクラブやサークル活動の活躍としては、男子バレーボール部が全日本バレーボール大学選手権大会において2018年度は準優勝、2019年度はベスト8であり、水泳部の飛び込みは日本学生選手権水泳競技大会において2018年度は男女ともに優勝、2019年度は男子優勝、女子準優勝といった成績を修め、少数教育ならではの質の高い指導を行っております。

本学は、福山市の北部の平野部に位置しているため、自然豊かで広大なキャンパスの中でのびのびと学業に専念できます。また、山陽新幹線が停車する福山駅前にも大学施設があり、2019年度の日本スポーツメンタルトレーニング指導士会第15回全国研修会の会場として用いられるなど、交通の利便性も優れています。

福山市は広島県東部と岡山県西部の県境に位置し、人口約47万人を擁する中核都市です。これは、広島県では広島市に次ぐ規模です。また、福山市は江戸時代に城下町として栄えた歴史を有しているため、福山城、鞆の浦をはじめとする史跡が数多く残っており、観光地としても楽しめます。さらに、瀬戸内海に面しているため、温暖な気候で過ごしやすく、海の幸にも恵まれていますので、是非お立ち寄りください。

学部・大学院

私は福祉健康学部健康スポーツ科学科に所属しております。本学科は健康、スポーツ、教職の3つを柱として教育を行っております。約400名が在籍しており、多くの学生がクラブやサークルに所属し、保健体育、養護教諭の教員免許や各種資格の取得を目指して学業に励んでいます。また、私自身が担当している授業は、学部では「スポーツ心理学」「スポーツ心理学演習」「メンタルトレーニング方法論」「メンタルトレーニング演習」「健康心理学」「体育実践演習（柔道）」、大学院では「スポーツ学特講Ⅰ」「スポーツ学演習Ⅰ」「スポーツ健康科学特講」を担当しております。一人でも多くの学生がスポーツ心理学に興味関心を持ち、学びたいと思えるような授業を展開できるように心掛けています。

研究室の概要

私が当研究室に着任して3年目となりました。どのような研究室にしていくか試行錯誤の毎日ではありますが、アスリートの競技力向上と実力発揮に貢献することを目的に研究室運営を行っております。また、当研究室ではアスリートが抱える心理学的な諸問題を解明するために、自律神経活動、皮膚電気活動、皮膚温などの生理指標を用いた実験や心理尺度を用いた調査などを行っております。

ゼミ活動は3年生の前期から始まります。現在、4年生8名、3年生8名の計16名が所属し、卒業論文作成に向けて研究活動を行っております。ゼミ活動としては、3年生では卒業研究に活用できる技術を身に付けるため、実験や調査に関する基礎的な知識を学び、4年生では自身の興味あるテーマに対し研究を行います。卒業研究の実験や調査は、少人数教育をいかし、きめ細かい指導のもとで行われています。

当研究室は修士課程の大学院生も受け入れており

ます。スポーツ心理学を研究テーマとした修士論文を作成するとともに、アスリートの競技力向上と実力発揮に貢献できる人材育成を行っております。そのために、大学院生には日本スポーツ心理学会認定スポーツメンタルトレーニング指導士の資格取得を目指して頂きたいと考えています。また、本学には社会人入試制度を経て、仕事と学業を両立している大学院生もいますので、当研究室にもそうした志を持った大学院生が増えることを期待しております。

今年度からは、私の大学院の指導教員であり、現在は同僚である楠本恭久先生と共にゼミ活動とは異なる活動として、心理研究会を立ち上げました。当研究会は心理学について知識を増やすとともに、心理的課題を持ったアスリートに対する心理サポートに関する研究と実践を行うことを目的としております。当研究会は学年や所属する研究室に関わらず、心理学やアスリートに対する心理サポートについて学びたいという学生を対象としております。このように、授業、研究室、研究会を通して、スポーツ心理学やスポーツメンタルトレーニングに興味関心を持つ学生、大学院生に学びの場を提供しています。

研究環境

研究環境としては、他の研究室と共有の実験室があります。実験機器としては、アイマークレコーダー、心電心拍センサ、呼吸運動モニタピックアップ、皮膚電気反応、赤外線サーモグラフィ、重心動揺計などスポーツ心理学の研究を行っていくうえで種々の実験機材を備えています。立ち上げて間もない研究室ということで、一から研究室作りを行う難しさを感じておりますが、様々なスポーツ心理学実験等に対応できるように研究室環境を構築している最中です。

心理サポート研究会、研究ミーティング、現場へのサポート

本学だけでの活動にとどまらず、学外での心理サポート研究会、研究ミーティング、現場へのサポートを行っています。私自身は、日本体育大学

の日体大アスリートサポートシステム (Nittaidai Athlete Support System:以下、NASS) の心理サポート研究会へ外部協力者として携わらせて頂いております。心理サポート研究会を通してアスリートに対する様々な心理サポートについて学びを深めています。研究ミーティングについては、他大学の先生方と随時行い、研究の質の向上に努めています。現場へのサポートについては、様々な競技選手に対して心理サポートを行っています。また、全日本柔道連盟の科学研究部にて、国内外の大会へ帯同し、世界で戦うアスリートに対して科学サポートを実施しています。

このように、本学だけでなく、学外にも学びの場を求めることで、有意義な時間を過ごすことが出来ています。今後も心理サポート研究会、研究ミーティング、現場へのサポート活動を通して学んだ知識を、当研究室の研究活動や心理サポートへ還元したいと考えています。

おわりに

当研究室は、2018年にスタートした若い研究室です。歴史はまだ浅いですが、創世期の活気があり、まだ伝統に固まっていない、自由度もあります。この2年間は、研究室の基礎作りを主として行ってきましたが、今後は、アスリートの競技力向上と実力発揮に貢献できる人材育成に向けて、積極的に他大学のゼミと交流できればと考えております。お力添え頂ける先生方がいらっしゃいましたら、是非とも、ご指導いただけますようお願い申し上げます。



写真1. 学部3年生や4年生ゼミナールの様子



写真2. スポーツ心理学研究室



写真3. 全日本柔道連盟科学研究部の関係者

研究室紹介 國學院大學人間開発学部健康体育学科 伊藤研究室

伊藤英之（國學院大學）

1. はじめに

私の研究室は、神奈川県横浜市の「たまプラーザ」という駅にある、國學院大學人間開発学部健康体育学科にあります。國學院大學は、明治15年に創設された皇典講究所を母体とし、大正9年にわが国で初めて認可された私立大学の一つです。人間開発学部は、ちょっと変わった名称の学部ですが、高度な教育力や指導力を持つ「人づくりのプロ」を育成することを目的として2009年4月にスタートした教育系学部です。その中にある健康体育学科は、様々なライフステージでの健康開発に寄与し得る指導者の養成を主な目的とした学科です。

私の研究室の一番の特徴は、とてもたくさんの方々のご指導やお力添えに支えて頂いているということです。

2. 研究室概要

私は2013年から研究室を持ちました。2020年6月現在の研究室の構成員は、教員1名と学生がゼミ生16名（4年生10名、3年生6名）、メンタルトレーニングスタッフ15名（ゼミ生が8名含まれています）の延べ31名です。研究室の主な仕事は、「学科の授業」、「ゼミの活動」、「メンタルトレーニング」の運営です。

1) 授業運営

私が担当する主な授業は、1年生を対象とした「スポーツ心理学」、2年生以上を対象とした「スポーツ心理学演習」、「メンタルトレーニング論」、「コーチング論」、そして3・4年生のゼミと呼ばれる「演習・卒業論文」です。本学では、「ゲスト講師制度」というものがあり、2020年度は、スポーツ心理学では日本大学の佐藤佑介先生、コーチング論では日本体育大学の高井秀明先生にそれぞれご協力頂き、先生方の研究や日頃の活動をもとに授業をして頂き

ました。他大学の先生のお話を伺える機会があることが、学生にとってはとても刺激的で満足度も高いようです。

2) ゼミの活動

1年次にスポーツ心理学に興味を持った学生が、2年次での授業を受けて、さらに興味が増した（または薄れなかった）学生が私のゼミを選択して入ってくるという流れになっています。ゼミでは、スポーツ心理学の研究手法への理解を深め、卒業論文を完成させることはもちろん、様々な行事も大切にしています。これまで実施してきた「真面目な行事」を3つご紹介します。1つ目は、日本大学の水落文夫先生にご協力頂き、大学院生の勉強会に参加させて頂いた「大学院体験」です。大学院生同士の研究に向き合う姿に触れ、ゼミ生の勉強に向き合う姿勢がガラッと変わりました。2つ目は、日本体育大学の高井秀明先生にご協力頂き、毎年開催している「合同ゼミ」です。日体大と本学以外にも、これまで帝京平成大学の園部豊先生や共立女子大学の片上江梨子先生のゼミにも参加して頂きました。他大学の先生からお話を伺えることはもちろん、同世代の他大学生との交流はゼミ生の考えの幅を広げてくれる良い機会になっているようです。3つ目は、国立スポーツ科学センターの立谷泰久専任研究員、佐々木丈子研究員にご協力頂き、毎年実施している「JISS見学会」です。JISSの施設・設備を見学させて頂いたり、JISSの役割や研究、実践についてのお話をさせて頂いたり、ゼミ生が大学で勉強していることが、どのようにアスリートに活かされているのかということを実感できるとても貴重な時間になっているようです。このような学外での学びに加えて、春・夏の「ゼミ合宿」、春の「お花見」、夏の「3年生ゼミ生歓迎BBQ」、冬の「納会」などの「レクリエーション行事」も大切にしています。

ゼミ生からは「やる時はやる、楽しむ時は楽しむ」というメリハリがある、「学内だけでなく、学外でも勉強する機会があり充実している」といったコメントがありました。学内だけでなく学外でも様々な活動を行うことで、ゼミ生にできるだけ多様な経験をしてもらって、自身の考えや価値観を広げてほしいと願い、ゼミの活動をしています。

3) メンタルトレーニングの活動

学部の方針に「授業と実践の往還の学び」を積極的に行うということがあります。そこで、メンタルトレーニングに興味を持ち、実践的に学びたいという学生のニーズに応えるために「メンタルトレーニングスタッフ」という枠組みを設けています。実践は、メンタルトレーニングを取り入れたいという地域のジュニアスポーツクラブチームや学校部活動にご協力を頂き、メンタルトレーニングの指導経験の場を設けて頂いています。指導対象は現役の選手ですので、しっかり勉強することを条件に登録した学生をスタッフとし、選手に指導するにあたっては勉強会や指導リハーサルを毎週欠かさずに行い、実践に向けた準備を続けています。勉強会には、日本大学の深見将志先生にもご参加頂き、スタッフへのご指導を頂いております。スタッフからは「目的を持って勉強でき、勉強したことが実践できる」、「たくさんの経験が積める」、「選手の成長を間近で感じられて、とてもやりがいがある」、「ともにやる気を持って勉強できる仲間ができた」といったコメントがあり、とても充実した活動になっているようです。

3. 研究活動

私は、これまでメンタルトレーニングに関する研究を中心に、主にアスリートの Belief がどのようなことに影響を及ぼすのか、Irrational Belief を変容することでどのような効果が期待できるのかというテーマについて研究をしてきました。研究を進めるにあたって、大阪体育大学の土屋裕睦先生をはじめ大阪体育大学の先生方や大学院生の方々に日頃から多くのご指導を頂いております。また、日本大

学の水落文夫先生をはじめ、日本大学の先生方や大学院生の方々にもたくさんのご指導やご協力を頂いております。様々な方々と繋がりながら、前向きに研究に取り組んでいます。

4. おわりに

私も私の研究室も、とてもたくさんの方々のご指導やお力添えに支えて頂いております。本稿を書かせて頂きながら、改めて実感し、感謝の気持ちでいっぱいです。与えて頂いてばかりでなく、私も少しでも皆様のお力になれるように頑張ります。これからも、たくさんの方々との繋がりを大切にしながら研究や教育をしていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



コロナ禍でもメンタリストは Zoom でできるグループワークを考えます



コロナに負けず Zoom でゼミ活動しています



ゼミ交流会の様子です（左上：片上先生の講演、右上：高井先生の心理技法体験、下：交流会）

IV. 学位論文紹介

小学生の体育学習への動機づけに関する研究

伊藤豊彦 (久留米大学人間健康学部)

学位：博士 (教育学)、授与機関：九州大学

取得日：2019年5月31日、指導教員：杉山佳生教授

【研究の背景と目的】

学校体育が抱える問題点として、子どもの体力低下傾向や運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向に対する対応の必要性 (中央教育審議会、2016) が指摘され、現行の学習指導要領の改善の具体的な事項として、「すべての児童が、楽しく安心して運動に取り組むことができるようにし、その結果として体力の向上につながる指導等の在り方について改善を図る。その際、特に、運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童への指導のあり方について配慮すること (文部科学学習、2017)」が求められている。したがって、教師にとって、どのようにすれば子どもの学習意欲を高めることができるのかという問題は学校体育が抱える問題の解決のため極めて重要な課題である。

ところで、このような学習意欲にかかわる問題を心理学では動機づけの問題として扱い、人間の多様な行動の理由やその生起メカニズムを解明することを目的に、これまで多くの有益な知見が蓄積されてきた。しかしながら、授業実践への貢献という観点からこれまでの体育における動機づけ研究をみると、学習意欲にかかわる理論が「二項対立的発想」、「要素主義」、および「量的側面」重視であることから択一的な心理的メカニズムで説明されることになり、授業実践場面における動機づけを支える多様な学習動機とそれらの統合的構造を捉えきれていないという課題がある (鹿毛、1999)。また、日々の授業における学習は、教師の指導や仲間との相互作用の中で行われるダイナミックなプロセスであり、動機づけに及ぼす学習環境要因の影響を検討することが欠かせないにもかかわらず、学習環境要因と動機づけとの関連について十分な検討がなされていないのが現状である。

そこで本研究では、小学生の体育学習への動機づけを改善するという視点から、授業実践場面を重視

したボトムアップ的な観点から学習動機を特定し、それらの統合的な構造を検討することを通して、体育学習への動機づけの個人差を明らかにすることを第1の目的とする。さらに、これまでほとんど検討されてこなかった動機づけの基本的条件と考えられる学習環境要因を取り上げ、学習動機と動機づけに及ぼす影響を明らかにすることを第2の目的とした。

【結果の概要】

1) 児童の体育学習への動機づけは、「実用志向」、「優越志向」、「承認志向」、「充実志向」、「集団志向」、および「成績志向」の内発的動機から外発的動機を含む6つの多様な学習動機に支えられていることが明らかとなった。また、6つの学習動機の統合的な構造、すなわち横断的な個人差をクラスター分析によって検討した結果、「無動機型」、「関係依存型」、「成績不安型」、「平均型」、「成績重視型」、「自我関与型」、「課題関与型」、および「統合型」という8つの学習動機類型 (プロフィール) に分類できることが明らかとなった。さらに、6つの学習動機を下位尺度とする体育における学習動機測定尺度を作成し、信頼性と妥当性の検討結果から、体育学習への動機づけを診断・評価することができる尺度であることが確認された (研究1、研究2、研究3)。

2) 体育学習への動機づけの基礎的条件と考えられる3つの学習環境要因を取り上げ、動機づけとの関連を検討した。まず、体育授業場面における動機づけ構造を取り上げた研究4では、「挑戦的環境」、「規範の欠如」、「脅威的環境」の3因子が抽出され、学習動機、学習方略などとの関係を重回帰分析によって検討した結果、挑戦的な学習環境は内発的な学習動機を高めることを通して、学習行動を高める方向で影響するのに対して、脅威的な学習環境は外発的な学習動機を高めることを通して、学習行動を低下させる方向で影響することが明らかとなった。

つぎに、体育学習場面の動機づけ雰囲気を取り上げた研究5では、「熟達雰囲気」、「協同雰囲気」、および「成績雰囲気」の3つが抽出され、学習動機および学習方略の使用との関連を構造方程式モデリングによって検討した結果、熟達雰囲気と協同雰囲気が体育学習への動機づけを高めるのに対して、成績雰囲気は体育学習への動機づけを抑制することが明らかとなった。

最後に、教師の自律性支援的行動を取り上げた研究6では、児童の心理欲求の充足を促す教師行動として「一般的学習支援」、「有能さ支援」、および「自律性支援」の3つの行動を特定し、学習動機および動機づけ指標との関連を構造方程式モデリングによって検討した結果、教師が一般的学習支援と有能さ支援を行うことが児童の学習動機を高めることを通して、体育学習への動機づけを高めることが明らかとなった。

【まとめ】

本研究を通して、小学生の体育学習への動機づけにおける個人差の理解と体育学習への動機づけを高める学習環境のあり方について、一定の知見が得られた。

まず、体育学習への動機づけは内発的動機から外発的動機を含む多様な学習動機に支えられているとともに、それらの多様な学習動機は個人の中で統合され、個人差を形成していることが明らかとなった。したがって、体育学習への動機づけを高めるためには、個人差、すなわち多様な学習動機が個人の中で統合されている状況に応じた指導の必要性が示唆された(第3章)。

つぎに、学習環境要因と動機づけとの関係において、動機づけ構造としての挑戦的な環境づくり、動機づけ雰囲気としての熟達雰囲気と協同雰囲気の創出、教師行動としての一般的学習支援と有能さ支援の重要性が示唆された。これらのことは、体育学習への動機づけを高めるためには、個人内要因への働きかけと同時に、適切な学習動機を育てる学習環境を創出することの重要性を示していることから、体

育学習への動機づけを高めるうえで体育学習における適切な学習環境の創出が基本的な条件であることが示唆された(第4章)。

【今後の課題】

1) 本研究では、学習動機の統合的構造による個人差を明らかにすることができたが、個人差に応じた指導を考える場合、そのような統合的構造にみられる個人差がどのように形成されるのかという問題が残されている。今後は、多様な学習動機に支えられた個人差がどのように形成されていくのか、その形成プロセスを発達の観点から検討する必要がある。

2) 本研究では、体育における学習動機と動機づけに影響する環境要因の検討を通して、教師が体育学習への動機づけを改善するための有益な知見を提供することができたが、学習環境要因に介入し動機づけへの効果を検証するまでには至らなかった。したがって、今後は、介入研究を通して、本研究の実践的有用性を検討していく必要がある。また、学習動機の統合的な発達に向けた学習環境要因のあり方については検討できていないため、学習動機の統合的な発達を支援するために必要な学習環境のあり方やそのメカニズムを解明していくことが必要である。

Underlying spatiotemporal structures in human chase and escape behaviors (ヒトの追跡および逃避行動に潜む時空間的構造)

筒井和詩 (名古屋大学大学院情報学研究所)

学位：博士 (学術)、授与機関：東京大学

取得日：2020年2月28日、指導教員：工藤和俊准教授

追跡-逃避行動は多くの動物種にとって生存に不可欠な営みであると同時に、高次の認知や運動機能が要求される現代スポーツの基盤となるスキルでもある。そのため、これらの行動はヒトを含む動物の認知運動制御機構を理解するための優れた研究対象であると考えられている。

スポーツ科学分野では、追跡-逃避行動の一類型といえる1対1の攻防に関心が寄せられてきた。1対1の攻防は集団スポーツにおける最小単位であるが、それでもなお、攻撃者と守備者の認知や運動などの多様な要素が相互作用する複雑な現象である。そのため、従来のスポーツ科学分野における研究では、問題をより単純化するために、対象動作や移動範囲を極度に制限したものが大半を占める。このようなアプローチには、類似の動作を繰り返し観察可能なため、安定した結果を得ることができるという利点がある一方で、相互作用的な二者の行動を調べることが難しいという問題点もある。たとえば、守備者の追跡行動に着目した研究では、統制を取るために事前に撮影した攻撃者の映像刺激を用いることが多く、守備者の応答に対して攻撃者が行動を変更するといった相互作用的な(あるいは再帰的な)行動について検討することは難しい。このような背景から、二者がフィールド(二次元平面)上を自由に動き回ることでできる状況での相互作用的な行動については未解明な点が多く残されている。

そこで本論文では、相互作用的な二者の攻防に対する理解を深めることを目的として、自由度の高い状況における1対1の攻防を対象とした研究を進めてきた。本論文は全6章から構成され、第1章では動物の追跡-逃避行動の研究およびスポーツにおける1対1行動の研究について概観し、第2章では守備者の追跡方略について、第3章では攻撃者の逃避(突破)方略について、第4章では攻防の成否を

規定する要因について、第5章では環境制約が攻防に与える影響について、それぞれ検討した。そして第6章では、これらの研究で得られた知見を元に総合考察を行った。以下では、これらの内容について紹介する。

研究1では、攻撃者と比較して行動の自由度が少なく、分析が容易だろうと予測される守備者の研究に取り掛かった。本研究では、スポーツにおける1対1の攻防を理解するための手がかりとして他動物の狩りの研究に着目し、その方法論を援用することで、守備者の追跡方略について検討した。実験は1対1の追跡-逃避課題を実空間(フィールド上)および仮想空間(モニター上)で実施した。両実験において時間最適方略と呼ばれるモデルの予測と守備者の行動にかなり高い一致度が得られた。これは、守備者が時間最適方略を採用していることを示唆するものである。この結果は、攻撃者と守備者の位置および速度情報のみによって守備者の移動方向をおよそ予測できることを意味しており、これまで複雑な現象であると考えられてきた1対1の攻防における守備者の追跡行動が比較的単純な規則によって記述できることを示している。また、時間最適方略は、タカやコウモリなどの狩りに関して観測されており、本研究の結果は追跡方略における種を超えた共通性を示唆している。

研究2では、研究1における守備者の研究結果を踏まえて、攻撃者の研究を進めた。時間最適方略を用いた守備者は、移動スピードが攻撃者と等しく(あるいは攻撃者よりも大きく)、かつ守備者に視覚運動遅延がないという条件下では、理論上負けないことが保証される。したがって、守備者がおよそ時間最適方略に従うとすると、攻撃者が突破を成功させるには守備者の視覚運動遅延を利用することが重要になる。そこで本研究では、攻撃者の方向転換の位

置やタイミングについての偏りと、それらに対する守備者の反応時間を調べた。実験には仮想空間での1対1課題を用いた。その結果、攻撃者の方向転換には、切り返し頻度における空間的一様性、および切り返し間隔における時間的二峰性という二つの大域的特性が存在することが明らかになった。守備者の反応時間の分析と合わせて検討した結果、これらの特性は、それぞれ守備者の反応時間を短くさせないこと、長くすることに役立っていたことが示唆された。

研究3では、研究1、2の知見を基に、攻防の成否に関わる重要な変数間の関係性を幾何学的性質より整理し、その理論的予測から、守備者の前進・後退および成功・失敗が、反応時間や移動速度（パラメータ）の変化に応じて生じるという仮説を検証した。実験には仮想空間での1対1課題を用いた。理論的予測通り、同一ペアの攻防であっても、これらのパラメータを実験的に操作することで守備者の見目の振る舞い（前進と後退）およびその成否が変化することが明らかになった。これらの結果は、守備者の前進と後退が、異なる追跡方略に基づく行動として現れるのではなく、同一の追跡方略における反応時間や移動速度パラメータに依存して生じることを示唆している。サッカーやバスケットボールなどのスポーツにおける守備行動では「ずるずる後退してしまう」ことが失敗に繋がると経験的に知られているが、その発生機序については未解明であった。本研究の結果は、「なぜ後退してしまうのか」というスポーツ現場の問いに対して一つの解を与えるものである。また、本研究の結果は、1対1の攻防の成否において重要であると言われる反応時間と移動速度が互換的な関係にあることを示唆するものであった。

研究4では、研究1から3の知見を基に、スポーツにおいてしばしば生じる時空間的制約によって追跡行動、逃避行動、およびそれらの成否がどのように変化するかを調べた。攻撃者、守備者の双方においてこれら時空間的制約に応じた行動の変化が観察されたが、これらの変化の程度は比較的小さく、環境の変化を相殺する程ではなかった。その結果、

時空間的制約によって二者の勝敗はおおよそ決定することが明らかになった。

最後に、これら一連の研究によって得られた知見を元に総合考察を行った。研究全体を通して興味深かったのは、参加者、研究間で攻撃者および守備者の行動（あるいは方略）に強い一貫性が見られたことである。これは、追跡および逃避行動において、行動の選択肢は多数存在しているように思われるが、相互作用的な二者の攻防において目的を達成するための合理的な選択肢は実質的にかなり限られており、その結果として、個人の移動能力や外部環境の違いに依らない頑健な行動規則が形成されたことを示唆している。また、このような合理性が、ヒトと他の動物の追跡および逃避行動に共通性が認められたことと関係しているものと考えられる。

本論文で得られた知見は、二次元平面上を動く二者の位置座標データの分析に基づくものであり、サッカーなどのスポーツの試合を分析するにあたって一つの基準となりうる。今後これらの知見を活用することで、試合中の個々の行動を定量的に評価可能になることが期待される。

対人間相互作用課題における協調ダイナミクス

向井香瑛（早稲田大学理工学術院）

学位：博士（学術）、授与機関：東京大学

取得日：2020年3月23日、指導教員：工藤和俊准教授

研究の背景と目的

自己と他者の行為を協調させることは、人間が社会生活を営む上で重要であるとされる（Sebanz et al., 2006）。近年、力学系アプローチを援用した対人間運動協調課題によって、その一端が明らかにされている。力学系アプローチは、人間の協調運動における秩序形成を数理で記述する理論的枠組みであり、この理論的枠組みは体肢間の運動協調（Kelso, 1981）、知覚と運動の協調（Carson et al., 1996）や対人間の運動協調（Schmidt et al., 1991）など、人間の協調運動ダイナミクスを統一的に記述することを可能とする。力学系アプローチを援用した対人間運動協調研究は、その多くが2者の協調運動が自己組織化することを報告したに留まる。私たちは、自己と他者の行為をうまく協調できるわけではなく、協調できない場面も存在する。このような場面にどのような要因が関与するかについては、未だ不明な点が多い。そこで本博士論文では、力学系アプローチを援用した課題を用いて、意図的な対人間運動協調（研究ⅠとⅡ）、および非意図的な対人間運動協調（研究Ⅲ）に関与する内的・外的因子を明らかにすることを目的とした。

研究Ⅰ：意図的な対人間協調行為に影響を及ぼす個人内因子

研究Ⅰでは、意図的な対人間運動協調において、その協調パフォーマンスに関わる個人内因子を明らかにするために、二つの個人内の協調課題を実施した。はじめに、両手の左右方向の周期的運動を用いて1/4周期の位相ずれを作り出す両手協調課題を実施した。個人の協調能力は1/4周期の位相ずれを2試行連続して作り出すことができた試行回数から定量化した。その結果、個人の運動能力は対象者によって異なることが明らかとなった。次に、左右に周期的に動く視覚刺激に対して、4つの位相ずれを作り

出すように利き手を動かす知覚運動協調課題を実施した。(1) 同位相条件（周期ずれなし）、(2) 逆位相条件（1/2周期のずれ）、(3) リード条件（視覚刺激よりも1/4周期先行して動く）、(4) フォロー条件（視覚刺激を1/4周期後続して動く）。個人内の協調能力は、それぞれの協調条件で求められる位相ずれ±30度の範囲にある位相ずれを成功位相ずれとし、この成功位相ずれが試行内で現れる割合によって評価した。その結果、フォロー条件よりもリード条件の方がうまく協調できないことが明らかとなった。

研究Ⅱ：意図的な対人間協調行為における内的・外的因子

研究Ⅱでは、ペアを組んだ2者で1/4周期の位相ずれを作り出す対人間運動協調課題を実施した。はじめに、対人間運動協調パフォーマンスにかかわる因子として、個人内の協調能力に着目した。対人間協調パフォーマンスは、1/4周期の位相ずれを2回連続して作り出すことができた試行回数から定量化した。個人内の協調能力は、研究Ⅰの両手協調課題における1/4周期の位相ずれを2回連続して作り出すことができた試行回数を使用した。その結果、個人内の運動協調能力は対人間運動協調能力に寄与しないことが明らかとなった。次に、対人間運動協調パフォーマンスにかかわる因子として、社会的認知機能に着目した。社会的認知機能は自閉症スペクトラム指数（AQ）を用いて評価した。その結果、AQ比のより小さいペア（AQが大きく異なるペア）が、AQ比のより大きいペア（AQの類似するペア）よりも、高い対人間運動協調パフォーマンスを示した。また、対人間運動協調課題中に、2者のうちAQの高い人がリーダーとなり、AQの低い人がフォローの役割を担ったことが示された。

研究Ⅲ：非意図的な対人間協調における内的・外的因子

研究Ⅲでは、2者がさまざまな対人距離で向かい合って立位姿勢を維持する対人間運動協調課題を実施した。ここでは、非意図的な運動同期にかかわる因子として、2者間距離に着目した。2者の身体動揺の同期（ここでは、ペアのうち一方が矢状面前方へ傾いたときに、他方が矢状面後方へ傾く協調状態のこと）を調査するため、頭部と足圧中心の位置データを取得した。その結果、頭部・足圧中心ともに2者間距離が短くなるほど2者の同期が高くなることが明らかとなった。また、個人内の姿勢の揺らぎ特性は、2者が対面して立つ時と1人で立つ時とは異なることが明らかとなった。1人で立つ時は、発散傾向の高い揺らぎ特性であったが、他者と対面して立つことで、発散傾向の抑えられた揺らぎ特性を持つ姿勢制御を行っていた可能性が示された。さらに、様々な時間スケールで対人間運動同期について調査したところ、時間スケール・身体部位ごとに異なる同期が観察された。短い時間スケールでは、足圧中心において同期が見られなかった一方で、頭部は同期していた。長い時間スケールでは、頭部・足圧中心ともに同期していた。また、社会的認知機能が非意図的な運動同期に影響を及ぼす可能性についても調査したところ、対面する2者の社会的認知機能の組合せは非意図的な運動同期に影響を及ぼさない可能性が明らかとなった。

まとめ

本研究は、対人間運動協調における協調パフォーマンスに関与する内的・外的因子を明らかにすることを目的とした。研究ⅠおよびⅡの結果から、意図的な対人間運動協調には、個人内の協調能力ではなく、社会的認知機能の組合せが影響を及ぼすことが明らかとなった。これまで社会的認知機能の低い人（本研究ではAQの高い人）の特徴として、他者とうまく協調できないという知見が報告されてきた（Varlet et al., 2012）。しかし本研究によって、ある特定の社会的文脈では、社会性認知機能の

組合せを考慮することで、たとえ社会的認知機能の低い人がペア内にいたとしても、高い対人間協調パフォーマンスを示す可能性があることが示された。また、研究Ⅲの結果から、非意図的な対人間運動同期には2者間の距離が影響を及ぼすことが明らかとなった。意図的な対人間運動協調では社会的認知機能の組合せが関与したのに対し、非意図的な対人間運動同期には、社会的認知機能の組合せが関与しない可能性が示された。このことは、意図的な対人間課題では、より他者を配慮するというような協調性が求められる課題であった一方、非意図的な対人間課題では、協調することを要求される課題ではなかったことが一因として考えられる。非意図的な対人間課題では、相互協調的自己感をもつ人や、他者に対して高い共感性を持つ人が、他者の癖や言語を無意識に模倣する傾向にある（Chartrand & Bargh, 1999）ことから、協調場面に応じて、対人間協調に関与する要因は異なった可能性が考えられる。

本博士論文の研究Ⅱの成果は、以下の学術雑誌に掲載されている。

Mukai, K., Miura, A., Kudo, K., Tsutsui, S. (2018) The effect of pairing individuals with different social skills on interpersonal motor coordination. *Frontiers in Psychology*, 9: 1708.

注意の焦点づけが遠投運動のパフォーマンスおよび学習に与える影響

大木雄太 (筑波大学体育系)

学位：博士 (体育科学)、授与機関：筑波大学

取得日：2020年3月25日、指導教員：國部雅大助教

注意の焦点づけ (attentional focus) が運動のパフォーマンスおよび学習に対して大きな影響を有していることが明らかになっている (Wulf, 2013)。これまでの一連の研究では、注意の焦点づけの中でも特に内的焦点 (internal focus) と外的焦点 (external focus) の比較が行われてきた (e.g., Wulf et al., 1998)。内的焦点とは自身の身体運動への注意であり、外的焦点とは環境に対して身体運動が与える効果への注意であると定義されている。そして様々な運動において、外的焦点を使用するのパフォーマンスが内的焦点を使用するのより有効であることが示されている (Marchant et al., 2007, 2009)。その理由として、内的焦点では、運動の制御過程に意識的に介入することにより、自動的な運動制御が妨害されるのに対し、外的焦点では、無意識的、反射的な過程が最大限に活用され、自動的な運動制御が促進されることが挙げられている。しかし、注意の焦点づけに関する先行研究には、いくつかの課題が残されている。まず、多くの研究では正確性の要求される運動や比較的小さな力の発揮で行われる運動が対象とされている一方で、大きな力の発揮や全身の筋の協調が求められる運動を対象とした検討が十分に行われていないという点である。また、このような運動を対象とする場合、注意の焦点づけの影響を内的焦点と外的焦点の比較のみにより検討するのではなく、注意を向ける身体部位を複数設定して検討する必要がある。さらに、熟練度および長期間の学習による影響についても詳細な検討を行う必要がある。以上から本研究では、3つの検討課題を通して、注意の焦点づけが遠投運動のパフォーマンスならびに学習に与える影響を明らかにすることを目的とした。第1章では、当該研究領域に関する先行研究を整理し、問題の所在および目的を明確にした。

第2章 (検討課題1) では、ボールの遠投に関し

て熟練度の高い野球選手を対象に、内的焦点を複数設定し、注意を向ける身体部位によるパフォーマンスへの影響を明らかにすることを目的とした。硬式野球ボールの遠投を課題とし、手首に注意を向ける手首内的焦点条件、体幹に注意を向ける体幹内的焦点条件、そしてボールの軌道に注意を向ける外的焦点条件の3条件を比較検討した。その結果、外的焦点条件と体幹内的焦点条件に比べ、手首内的焦点条件では有意に遠投距離が短かった。さらに体幹内的焦点条件と外的焦点条件の遠投距離については差がみられなかった。また注意の焦点づけによって、ボールの投射角は変動するが、初速は変動しないことが明らかになった。以上のことから、同じ内的焦点であっても、注意を向ける身体部位によってパフォーマンスへの影響が異なること、また注意の焦点づけの違いによる遠投距離の変動は、ボールの初速が変動するのではなく、主にボールの投射角が変動することによって生じていることが示唆された。

第3章 (検討課題2) では、ボールの遠投に習熟していない非利き手を用いて、注意の焦点づけが遠投パフォーマンスに与える影響の熟練度による違いを明らかにすることを目的とした。熟練度による違いをより詳細に検討するため、同一対象者の左右の肢を用いて対象者内の比較を行った。硬式テニスボールの遠投を、検討課題1と同様の方法により、利き手と非利き手それぞれを用いて行った。その結果、利き手に関して、体幹内的焦点条件と外的焦点条件は手首内的焦点条件よりも有意に遠投距離が長く、体幹内的焦点条件と外的焦点条件の遠投距離は差がみられなかった。一方、非利き手に関して、手首内的焦点条件と体幹内的焦点条件は外的焦点条件よりも有意に遠投距離が短く、手首内的焦点条件と体幹内的焦点条件の遠投距離は差がみられなかった。ボールの投射角についても遠投距離と同様の結果が得られ、ボールの初速については条件間で差は

みられなかった。以上のことから、注意の焦点づけがパフォーマンスに与える影響の熟練度による違いは、注意を向ける要因に依存し、体幹への注意が遠投パフォーマンスに与える影響は熟練度によって異なるが、手首への注意と軌道への注意の影響は変わらないことが明らかになった。また検討課題1と同様、注意の焦点づけによって、ボールの投射角は変動するが、初速は変動しないことが明らかになった。

第4章(検討課題3)では、ボールの遠投に習熟していない非利き手を用いて、注意の焦点づけが遠投の学習に与える影響を明らかにすることを目的とした。非利き手による硬式テニスボールの遠投を課題とし、その学習期間をより長期間に設定した。対象者はランダムに3群(手首内の焦点群、体幹内の焦点群、外的焦点群)のいずれかに割り当てられ、10回(日)の学習ブロックと2回のテスト(プレテスト、ポストテスト)を行った。その結果、学習段階において、内的焦点群は遠投距離の有意な向上がみられた一方で、外的焦点群は有意な向上はみられなかった。またポストテストでは、手首内の焦点条件よりも外的焦点条件において遠投距離が有意に長くなったことから、いずれの群で学習したかに関わらず、ポストテストでは外的焦点が有効であることが示唆された。以上のことから、遠投の学習段階においては手首や体幹に注意を向ける内的焦点が有効であり、テスト段階においてはボールの軌道に注意を向ける外的焦点が有効であると考えられる。

第5章では総合考察、第6章では本研究の結論と応用可能性について述べた。本研究では、注意の焦点づけが遠投運動のパフォーマンスおよび学習に与える影響について、以下のことが明らかになった。まず、遠投のパフォーマンス発揮に関して、外的焦点はいずれの熟練度であっても有効である。体幹への注意は、熟練度が高い場合は有効であるが、低い場合は有効でない。手首への注意はいずれの熟練度であっても有効でない。また遠投の学習に関しては、外的焦点よりも内的焦点が有効である。さらに注意の焦点づけによって、ボールの投射角は変動するが、初速は変動しない。本研究から得られた知見は、注

意の焦点づけに関して、遠投運動におけるより高いパフォーマンス発揮および効果的な学習の一助となることが期待される。

野球の捕手におけるプレー指示場面での状況判断に関する認知過程

菊政俊平（金沢学院大学）

学位：博士（体育科学）、授与機関：筑波大学

取得日：2020年3月25日、指導教員：國部雅大助教

球技スポーツにおける状況判断は、プレーの成否や勝敗に関わる重要な要素の一つである。球技スポーツを対象としたこれまでの研究では、選手自身が遂行するプレーに関する判断を行う場面が課題として取り上げられてきた。その一方で、集団で行う球技スポーツにおいては、チームメイトが遂行するプレーに関する指示を行うことが重要な課題となる。例えば、野球の捕手には、ランナーの動きを直接確認することが困難な位置で打球を処理する選手に対して、どの塁に送球するべきかを指示することが求められる。それは、捕手が全ての野手のなかで唯一、フィールド全体を見渡すことができる位置にいるためである。以上から、本論文では、野球の捕手を対象に、チームメイトが遂行するプレーに関する指示を行う際の認知過程について明らかにすることを目的とした。特に、予測・判断の早さと正確性、判断のバイアス、視覚探索方略という3つの観点を中心として、3つの研究を実施した。

検討課題1（第2章）では、野球の捕手におけるプレー指示場面での状況判断および視覚探索に関する方略について検討した。野球の捕手、野手、非球技経験者を対象に、捕手の視点から撮影したノーアウトランナー1塁（無死1塁）での投手に対する送りバントの映像を呈示した。対象者は眼球運動測定装置を装着し、適切なタイミングで指示する塁に対応するボタンを押すことで、1塁または2塁への送球に関する判断（投手への指示）を行った。対象者は各試行終了後、主に注意を向けた対象について評価するための用紙に回答した。刺激の検出力に関する理論である信号検出理論（Signal Detection Theory）を用いた分析を行った結果、捕手は野手や非球技経験者に比べて、高い信号検出力に基づいて優れた状況判断を行うことが確認された。また、野球選手（捕手および野手）は誤った判断によって失点の可能性が高い状況が生じるリスクを回避するた

めの判断の方略を有することが明らかになった。さらに、捕手はバットとボールのインパクトから判断までボールに視線を固定した状態で、インパクト時には主にボールに注意を向け、判断時には主に注意を向ける対象を投手やランナーに切り替えていることが示された。これらのことから、プレーの指示に関する状況判断に優れた捕手は、高い信号検出力、野球の競技経験に基づく特有の判断のバイアス、および効果的な視覚探索方略を有することが示唆された。

検討課題2（第3章）では、野球の捕手におけるプレー指示場面での予測について、時間的遮蔽法を用いて検討した。野球の捕手、野手を対象に、検討課題1で使用した映像をインパクトの瞬間を基準として4段階の時刻で遮蔽して呈示した。対象者は映像遮蔽後速やかに、2塁がアウトと予測した場合には2塁、セーフと予測した場合には1塁と口頭で回答した。結果として、捕手の予測正確性および信号検出力は野手よりも高いことが示された。また、捕手と野手において時間的遮蔽の効果に差異がみられなかった。これらの結果から、捕手は野手に比べて、早い段階から最終的な判断を行う直前まで、高い信号検出力に基づいて優れた予測ができることが示唆された。さらに、インパクト直後の情報が得られることによって、2塁がアウトの試行に対する予測正確性が高まるとともに、1塁を選択する判断のバイアスが小さくなることが示された。これらのことから、インパクト直後の時間帯には、誤った判断によって失点の可能性が高い状況が生じるリスクを回避するための判断のバイアスを小さくする情報が含まれることが示唆された。

検討課題3（第4章）では、イニングや得点差といった試合状況に関する情報が野球の捕手におけるプレー指示場面での状況判断に及ぼす影響について検討した。野球の捕手を対象に、試合状況に関する条件として、1回表で同点の条件、9回表で1点負

けている条件、9回表で同点の条件、9回表で1点勝っている条件の4条件のもと、検討課題1で使用した映像を呈示した。対象者は試合状況を想定したうえで、適切なタイミングで指示する塁に対応するボタンを押すことで、1塁または2塁への送球に関する判断（投手への指示）を行った。対象者は各条件終了後、どのような判断の方略を用いていたのかについて言語報告を行った。また、全試行終了後には、イニングや得点差による判断の方略の違いについてそれぞれ言語報告を行った。結果として、試合状況によって捕手の判断のバイアスが変化しており、試合の終盤で負けている状況では、序盤で同点や終盤で勝っている状況に比べて、1塁への送球を指示するバイアスが小さいことが明らかになった。また、捕手は試合状況によって意識的に異なる判断の方略を選択しており、試合の序盤で同点や終盤で勝っている状況では、誤った判断によって複数失点の可能性が高い状況が生じるリスクを回避する傾向が強く、試合の終盤で同点や負けている状況ではその傾向が弱いことが示唆された。さらに、意識的に選択した判断の方略に基づいて捕手の判断のバイアスが変化することが示された。これらのことから、捕手はイニングや得点差といった試合状況に関する情報をもとに、事前にどのような判断の方略を用いるのかを意識的に選択しており、その選択に基づいて判断のバイアスが変化することが示唆された。

本論文では、以上の3段階の研究を通して、以下に示す3つの結論が得られた。

- 1) 捕手は早い段階からチームメイトが送球する塁におけるアウトまたはセーフに関する優れた予測ができるものの、必ずしも素早い判断を行っているわけではなく、指示を行う必要がある時点までの視覚情報を獲得してから高い信号検出力に基づいて正確な判断を行う。
- 2) 捕手はイニングや得点差といった試合状況に関する情報をもとに、事前にどのような判断の方略を用いるのかを意識的に選択する。そして、インパクト直後の時間帯には、誤った判断によって失点の可能性が高い状況が生じるリス

クを回避するための判断のバイアスが小さくなり、最終的には、野球の競技経験に基づくリスク回避的なバイアスをかけた判断を行う。こうした判断のバイアスは、意識的に選択した判断の方略に基づいて変化する。

- 3) 捕手はインパクトから判断までボールに視線を固定した状態で、インパクト時には主にボールに注意を向け、判断時には主に注意を向ける対象を投手やランナーに切り替えている。

本論文は集団で行う球技スポーツにおいて重要となる、チームメイトが遂行するプレーに関する指示について初めて検討したものである。本論文は、球技スポーツ選手が集団の中で状況判断を行う際の情報処理過程の解明に貢献するとともに、体育・スポーツの場面で状況判断に関する学習や指導を行う際の有意義な資料となることが期待される。

V. 海外情報

海外情報

渋谷崇行（桐蔭横浜大学）

2019年9月から2020年3月までの6カ月間、イギリスのウースター大学（University of Worcester）にAcademic Visitorとして受け入れて頂いた。同大学があるウースターは、イギリスの中央部に位置する人口約10万人の町である。主要都市からのアクセスは、いずれも電車でロンドンからは3時間程度、バーミンガムからは40分程度のところにある。こぢんまりとした町の中央部にはセヴァーン川が流れ、そのほとりにはウースター大聖堂が存在感を示している。大聖堂は町のランドマークであるとともに、卒業式などで誰もが聴いたことがある「威風堂々」を作曲したエドワード・エルガーが最初に音楽を学んだ場所としても有名である。

ウースター大学は本務校である桐蔭横浜大学と学術交流協定を結んでいる。元々は教員養成を目的としたカレッジであったが2005年に総合大学となり、現在では4キャンパスで1万人の学生が学ぶ。2016年4月にはイギリス議会で同大の「インクルーシブスポーツ」に関わる取り組みが高く評価されるとともに、同年9月にはイギリスで高等教育機関に与えられる最も名誉ある賞である「University of the Year」6大学に選ばれている。

ウースター大学で学べる領域は多岐にわたり、「教育」や「ビジネス」などの主要領域はもちろんのこと、アニメ、映画、ゲームの制作などについて学ぶ「芸術デザイン」などもある。特に興味が引かれたのは、「パフォーマンス」ではダンスや音楽、演劇などが学べるとともに、ドラマと心理学を結びつけたようなユニークなコースもある。日本の大学の学部構成を縦割りとして表現するならば、学部横断的な学びを可能とするコース編成が行われているように感じた。

大学図書館は町の中心部にあり、昼夜問わず多くの市民や学生が集っていた。カフェやギャラリーも併設され、大学が町に溶け込んでいるように感じられた。驚くことに、ウースター大学はプロバスケットボールチーム（ウースターウルフズ）のオーナーで

もある。シーズン中は定期的に大学キャンパス内のバスケットボールアリーナに市民が集結し、アルコール片手に自チームを応援する姿は、地域に根差す大学の理想を描いたようであった。市民とともに学生や教職員も加わって皆が一つの空間を楽しんでいた。そこに、文化としてのスポーツが我々の生活にもたらしてくれる潤いのようなものが感じられた。

スポーツ運動科学部（School of Sport and Exercise Science）はメインキャンパス（St. John's）にある。カリキュラムは14コースで編成され、そこには体育やスポーツ科学、スポーツ運動心理学の他、フットボールビジネスマネジメント、アウトドアアドベンチャーリーダーシップ、ディスアビリティスポーツ、等が含まれていた。授業を選択する学生の立場からすれば、自らの興味や関心に応じて特徴のある学びができる仕組みができていたようであった。

ところで、私自身は2019年から（公財）日本スポーツ協会の指導者養成講習会でコーチデベロッパーとして活動を開始したところであった。「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム」に示されたコーチ自身の「人間力（コーチングの理念哲学、対自分力、対他者力）」は、私自身の研究上の関心と重なる部分が多い。しかし、そうした資質能力を育成するための方法に関しては、体系的なカリキュラムの中で学んだ経験はなく、イチから学ぶ必要があった。このようなことから、この度の研修ではコーチ育成の国際基準を理解することから始め、競技団体等で行われているコーチ育成に関わるカリキュラムについて知識を得ることを主なねらいとした。また、機会があればその実践を実際に目にして、今後のプログラム展開に役立つ方法を学ぶことができればよいとも考えていた。

研修期間中は、ウースター大学教授でスポーツコーチングとコーチデベロップメントを専門とするDr. Andy Caleのもとで学ばせていただくことに

なった。Dr. Andy Cale はラフバラー大学でスポーツ心理学の博士号を取得するとともに、UEFA（欧州サッカー連盟）のプロライセンスも保持している。現在は、FA（イングランドサッカー協会）でコーチ育成に関わっていることはもとより、コーチを育成するコーチデベロッパーを対象とした研修プログラムの作成も行っている。

ここで、研修期間中の活動をいくつか紹介したい。ウースター大学では学部と大学院の授業に参加させていただいた。学部では「インクルーシブスポーツコーチングの原理」、「コーチングにおけるインtrapersonalスキル」、「コーチングにおけるInterpersonalスキル」の3つの授業に参加した。まず驚くのは、先程紹介したコーチ自身の「人間力（コーチングの理念哲学、対自分力、對他者力）」に対応する科目が、同大学では個別に存在していることであった。各科目は180分で構成され、前半は講義と討論による教室授業、後半は前半の講義で得た知識を利用した体育館でのコーチング実践であった。日本の大学では、同じ学科専攻にある授業科目であったとしても、講義科目と実技科目の各回が連動していることはほとんどないと言ってよい。その点で、ウースター大学では十分な時間配分のもと、知識と実践を組み合わせる指導力を育成するという試みが効果的に行われているように感じた。これは日本でもスポーツの実践家養成に向けた学部教育を展開していくうえで、非常に参考になるものであった。

大学院の授業の中には、社会人がパートタイムとして参加しているものもあった。その中の一つであるFA（イングランドサッカー協会）のコーチを対象としたプログラムは、同国のナショナルトレーニングセンターであるSt. George's Parkで行われた。その日のテーマであったSituating Learning（状況的学習）に関する論文は事前に受講生に渡され、必要な知識を得た状態で当日の授業が行われた。Dr. Andy Cale のファシリテーションの下、グループワークやディスカッションを中心に授業は展開していく。コーチングの現場を持つ大学院生にとっては実践の知と理論の知を結び付ける作業が展開され

ていることが理解できた。それと同時に、大学教員の教育力には研究力だけでは不十分であることを強く感じた。大学が単なる知識の伝達ではなく、専門家の育成を担うのであれば、日本の大学教員の資質能力はこれまでとは異なる価値観と基準によって測られることが必要であろう。

イギリス滞在中に、ラグビーワールドカップが日本で開催されていた。決勝会場である横浜市に住んでいながら、それを異国で観戦することになったわけだが、ファイナリストの母国で熱戦に身を投じるのも他ではできない体験であった。イングランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズ、そしてジャパンのユニフォームが揃うパブで、決勝の時間に合わせて早朝から飲むビールの味は悪くはなかった。



大聖堂



学部授業

VI. 事務局報告

2019年度 体育心理学専門領域 第2回理事会 議事録

記録者：國部雅大

日時：2019年（令和元年）9月10日（火）12:00～13:05

場所：慶應義塾大学 第4校舎B棟 D405

出席者：工藤和俊（理事長）

関矢寛史、荒木香織、高井秀明（学会大会委員）

杉山佳生、三村 覚、森 司朗（企画委員）

土屋裕睦、平山浩輔、深見将志（広報委員）

國部雅大（庶務委員）

欠席者：山本裕二（会長）、奥村基生（会計委員）、木島章文、田中美吏（監事）、鈴木啓央（幹事）

挨拶（工藤理事長）

議事に先立ち、台風の影響により会長および数名について海外出張からの帰国が間に合わず、欠席となる
ことが工藤理事長より報告された。

<報告事項>

1. 前回理事会（2019年度第1回理事会）議事録確認（事務局）

前回は行われた理事会の議事録が確認された。

2. 会員の異動、会費納入状況、2019年度会計中間報告（庶務・会計委員会）

國部理事より、昨年度3月末時点の会員数662名から、本年度9月3日時点の会員数644名（内名誉
会員17名）へと推移していることが報告された。工藤理事長より、会費納入状況は特に問題ないこと
が報告された。2019年度の会計に関して、ランチョンセミナーを2回開催したため予算超過したが、ホー
ムページ管理費が少額となったため、全体として予算内で執行できる見込みであることが報告された。
また、特別レクチャーの演者（Markus Raab先生）の講演料に関して、体育心理学専門領域におけるシ
ンポジウム演者の規定額に準じて支出すること、また演者への土産代（2,916円）を予備費から支出す
ることが報告された。

3. 会報31号（通巻59号）について（広報委員会、庶務・会計委員会）

國部理事より、広報委員会の協力のもと、会報31号が8月9日に発刊され、8月下旬に発送されたこ
とが報告された。工藤理事長より、原稿を広く募集したことで多くの会員による執筆があり、原稿料が
やや予算超過したものの、全体としては予算内で収まっていることが報告された。

また、過去2年間の会報原稿料の一部（研究室紹介、学位論文紹介、海外情報）に、事務局の確認ミス
による未払い（95,000円）があることが報告された。これに関して、今年度予算の予備費から支出し、
会計を再度確認の上支払い手続きを進めることが報告された。

4. 第70回大会について（学会大会委員会）

工藤理事長より、学会大会においてシンポジウム1つ、キーノートレクチャー1つ、特別レクチャー1つ、
ランチョンセミナー2つ、口頭発表8題およびポスター発表74題が予定されていることが報告された。

5. 2020 横浜スポーツ学術会議について（事務局）

工藤理事長より、次年度は、パシフィコ横浜において9月8日～12日の日程で横浜スポーツ学術会議が開催されること、またそれに伴い日本体育学会の年次大会は開催されないことが報告された。

6. 2019 年度研究会助成について

工藤理事長より、会員にメールで案内し募集した結果、2つの研究会（スポーツ動機づけ研究会、臨床スポーツ心理学研究会）から助成申請があり、理事によるメール審議の上採択されたことが報告された。なお、昨年度は追加募集を行ったが、今年度は予備費からの支出が多いため追加募集を行わないことが確認された。

7. 日本体育学会第70回大会参加助成について

大学院生を対象に大会参加助成の希望を募ったところ、7名からの応募があり、理事によるメール審議の結果、7名全員を採択とし助成を行ったことが工藤理事長より報告された。なお、内1名が申請時点では体育心理学専門領域の会員でなかったが、申請時に入会の意味があり申請直後に入会が確認されたため、採択したことが報告された。

<審議事項>

1. 2020 年度事業案

工藤理事長より、2020 年度事業案が提案され、承認された。内容は1. 体育心理学専門領域学術／社会貢献企画、2. 総会、3. 2021・2022 年度体育心理学専門領域役員選挙、4. 会報第32号の発行、5. 理事会（2回）、6. 2020 横浜スポーツ学術会議への若手研究者参加支援、7. 研究会活動支援、8. 体育心理学専門領域とスポーツ心理学会の統合に関する検討、9. その他、であった。なお、体育心理学専門領域学術／社会貢献企画は、横浜スポーツ学術会議とは別に専門領域が独自に行う企画であり、学会大会委員会と企画委員会が合同で担当することが確認された。また、総会も含めた開催時期については今後検討を行うことが確認された。

2. 2020 年度予算案

工藤理事長より、2020 年度の予算案が提示され、承認された。前年度予算からの主な変更点としては、会報原稿料の減額、学会大会／特別企画関連経費の減額、役員選挙実施費の増額、ホームページ管理費用の減額であった。

3. 2019 年度総会議事次第

工藤理事長より、2019 年度の総会の議事についての提案があり、承認された。

4. 体育心理学専門領域会報のオンライン化検討について

工藤理事長より、体育心理学専門領域会報のオンライン化についての提案があり、再来年度（2021 年度）からのオンライン化に向け、今後検討を進めていくことが承認された。オンライン化のメリットとして、会報関連費用の軽減、事務局の業務負担軽減、各種助成事業の充実などが説明された。

5. 体育心理学専門領域とスポーツ心理学会の統合検討について

工藤理事長より、体育心理学専門領域とスポーツ心理学会の統合検討に関するこれまでの経緯説明があり、意見交換の上、継続審議となった。今年度の総会にて統合の可否を決定する段階には至っておらず、今後は日本体育学会本部における研究組織に関する検討内容もふまえて統合案の検討を行い、次年度以降の専門領域総会にて統合案を提示し、統合の可否を決めていく工程が了承された。

6. その他

第1回理事会で承認された本年度事業の社会貢献活動支援について、企画委員会が募集要項の文案を作成し、会員に対してメールで募集を行うことが確認された。

次回の学会大会（筑波大学）に向けて、専門領域での企画を検討するため、日本体育学会が企画する大会スケジュールを早い段階で把握できるように情報共有を行っていくことが確認された。

以上

2019年度 体育心理学専門領域 総会 議事録

日時：2019年（令和元年）9月11日（水） 13:30～14:30

会場：慶應義塾大学 第4校舎B棟 J21

I. 開会の辞

II. 会長挨拶

III. 議長選出

永野智久先生（慶應義塾大学）が議長の指名を受け、議長を務めた。

IV. 報告事項

1. 2019・2020年度 体育心理学専門領域 理事会役員

2019・2020年度役員役割を下記のとおりとすることとした。なお、事務局は工藤和俊（東京大学）、國部雅大（筑波大学）、奥村基生（東京学芸大学）が担当することとした。

(1) 任期 2019年4月1日－2021年3月31日

(2) 会長 山本裕二

(3) 理事 工藤和俊（理事長）

関矢寛史、荒木香織、高井秀明（学会大会委員）

杉山佳生、森 司朗、三村 覚（企画委員）

土屋裕睦、深見将志、平山浩輔（広報委員）

國部雅大、奥村基生（庶務・会計委員）

木島章文、田中美吏（監事）

鈴木啓央（幹事）

2. 2019年度事業について

(1) 理事会（事務局）

第1回理事会を2019年3月30日（土）10:00～12:00に名古屋大学にて開催した。また、第2回理事会を2019年9月10日（火）12:00～13:30に慶應義塾大学日吉キャンパスにて開催した。

(2) 体育心理学専門領域会報第31号を2019年8月9日付で発行した。（広報委員会）

(3) 日本体育学会第70回大会における専門領域の活動（学会大会委員会）

慶應義塾大学にて一般発表（口頭発表8、ポスター発表74の計82）、キーノートレクチャー1つ、シンポジウム1つを開催する。また、特別レクチャー1つ、ランチョンセミナー2つを開催する。

(4) 会員異動（庶務・会計委員会）

2018年3月の会員数：670名

2019年3月の会員数：662名

3. 2019・2020年度の体育学研究・IJSHSの編集委員推薦について

体育心理学専門領域から推薦した下記の先生方が各誌の編集委員として選出された。

体育学研究編集委員：石倉忠夫先生、上野耕平先生、高見和至先生、樋口貴広先生、幾留沙智先生、小谷泰則先生

IJSHS編集委員：清水安夫先生、村山孝之先生、横山慶子先生

4. 2019年度の学会賞選考委員の推薦について
体育心理学専門領域から推薦した荒木雅信先生が委員として選出された。
5. 2019・2020年度の政策検討・諮問委員会委員の推薦について
体育心理学専門領域から推薦した工藤和俊先生が委員として選出された。
6. 2019年度の若手研究者委員会委員の推薦について
体育心理学専門領域から推薦した國部雅大先生が委員として選出された。
7. 2019年度研究会助成について
2件の応募があり、全て承認された。
8. 日本体育学会第70回大会参加助成について
7名の応募があり、全て承認された。
9. 2020 横浜スポーツ学術会議
日時：2020年9月8日（火）～12日（土）
場所：パシフィコ横浜
10. 体育心理学専門領域とスポーツ心理学会の統合検討について
体育心理学専門領域とスポーツ心理学会の統合検討ワーキンググループにおいて、検討が進められていることが報告された。

V. 審議事項

1. 2018（平成30）年度収支決算報告
事務局より、2018（平成30）年度の決算報告が提示された。木島監事より監査報告が行われ、会計処理が適正であることが報告された。審議の結果、決算報告が承認された。
2. 2019年度予算・補正予算
工藤理事長より、2019年度の予算・補正予算案が提示され、承認された。会報送付用封筒代、学会大会のセミナーの司会・演者への謝礼、ワーキンググループの会議に係る交通費に関して増額、ホームページ管理費用に関して減額を行った。
3. 2020年度事業計画
工藤理事長より、2020年度の事業計画が以下のとおり提示され、承認された。
 - (1) 体育心理学専門領域学術 / 社会貢献企画
 - (2) 総会
 - (3) 2021・2022年度役員選挙
 - (4) 体育心理学専門領域会報第32号の発行
 - (5) 理事会（2回）
 - (6) 2020 横浜スポーツ学術会議への若手研究者参加支援
 - (7) 研究会活動支援
 - (8) 体育心理学専門領域とスポーツ心理学会の統合に関する検討
 - (9) その他
4. 2020年度予算
工藤理事長より、2020年度の予算案が提示され、承認された。

5. 体育心理学専門領域会報のオンライン化検討について

工藤理事長より、体育心理学専門領域会報のオンライン化検討について、経緯説明を含めた提案があり、今後オンライン化に向けての検討を進めていくことが承認された。また、山本会長より、来年度発行の会報からオンライン化を実施することについての提案があり、審議の結果、承認された。

6. 体育心理学専門領域とスポーツ心理学会の統合検討について

工藤理事長より、体育心理学専門領域とスポーツ心理学会の統合検討に関するこれまでの経緯説明があった。本専門領域の学術性および研究基盤を担保し、日本体育学会における本専門領域の存在意義を高めるためにも、統合へ向けての詳細な検討を今後さらに進めていくことについての提案があり、承認された。

7. その他

記念事業積立金の用途に関して、今後本専門領域にて詳細案を検討していくことが提案された。

VI. 議長退席

VII. 閉会の辞

2020 年度（令和 2 年度） 体育心理学専門領域 第 1 回理事会 議事録

記録者：國部雅大

日時：2020 年（令和 2 年）3 月 31 日（土）10:30～12:05

場所：web 会議システムによるオンライン開催（新型コロナウイルス感染拡大防止への対応として）

出席者：山本裕二（会長）、工藤和俊（理事長）

関矢寛史、荒木香織（学会大会委員）

杉山佳生（企画委員）

土屋裕睦、平山浩輔、深見将志（広報委員）

國部雅大、奥村基生（庶務・会計委員）

木島章文、田中美史（監事）

鈴木啓央（幹事）

欠席者：高井秀明（学会大会委員）、三村 覚、森 司朗（企画委員）（理事：委任状）

挨拶（山本会長）

<報告事項>

1. 2019 年度第 2 回理事会、2019 年度総会議事録確認（事務局）

前回行われた理事会および総会の議事録が確認された。

2. 会員の異動（事務局）

奥村理事より、昨年度 662 名から 642 名（正会員 625 名、名誉会員 17 名）へと 20 名減少していることが報告された。

3. 会報第 32 号（通巻 60 号）発刊の準備状況（広報委員会、事務局）

國部理事より、第 70 回大会（慶應義塾大学）関連の原稿については 30 件中 2 件が未提出、研究会活動報告の原稿については 5 件中 1 件が未提出であり、今後早急に提出を要請することが報告された。研究室紹介、学位論文紹介、海外情報については、今後広報委員が原稿執筆者の募集および執筆依頼を行うことが確認された。巻頭言は会長に、編集後記は編集委員長にそれぞれ執筆を依頼する。会報は、7 月末頃に発刊および送付を予定している。また、過年度会報の原稿料に一部未払いがあった件について、執筆者と連絡が取れない 1 件を除き支払い手続きが完了したことが報告された。

工藤理事長より、来年度の会報（第 33 号）の内容について、今年度は通常の学会大会が開催されないため、その代わりに横浜スポーツ学術会議での発表やスポーツ心理学会との合同シンポジウムの内容を掲載する予定であることが報告された。

4. 名誉会員の推薦（事務局）

工藤理事長より、2021 年度の日本体育学会名誉会員の推薦依頼があり、日本体育学会理事会の推薦（役員歴有りの会員が対象）に基づき、体育心理学専門領域所属からは 2 名を該当者として推薦したことが報告された。

5. 社会貢献イベントの募集について（企画委員会）

杉山理事より、体育心理学専門領域が共催となる社会貢献イベントについて昨年 12 月を締切として募

集したが、会員からの応募がなかったことが報告された。

6. 2020 横浜スポーツ学術会議シンポジウム

工藤理事長より、体育心理学専門領域学術企画として日本スポーツ心理学会と共同で企画したシンポジウムが2件採択されたことが報告された。工藤理事長および関矢理事から、シンポジストの参加予定について報告された。なお、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえて検討中となっている本学術会議の開催に関する決定が4月以降に下されるため、それによっては今後シンポジウムが延期または中止となる可能性があることが説明された。

7. その他

土屋理事より、日本体育学会の組織・事業改革特別委員会での検討内容に関する報告があった。従来の専門領域は存続される一方で、2021年度の学会大会（於：筑波大学）では各専門領域が企画するシンポジウムはなくなり、新たに設置される専門領域横断型の5つの各部会（スポーツ文化部会、学校保健体育研究部会、競技スポーツ研究部会、生涯スポーツ研究部会、健康福祉研究部会）が企画するシンポジウムを開催することが検討されており、本年6月の体育学会総会に向けて審議される予定であることが説明された。今後、体育心理学専門領域から各部会の代表者（各1名）を理事会にて検討していくことが確認された。

<審議事項>

1. 2019年度決算案（事務局）【資料1】

奥村理事より、2019年度（令和元年度）決算案が提示された。木島監事から、会計監査により会計処理が適正であると認められたことが報告された。田中監事による会計監査は、新型コロナウイルスの影響により移動を控えたことから現時点ではまだ行われておらず、後日監査の機会を設けることが報告された。田中監事による会計監査の完了後、署名押印入り決算報告書を理事に送信の上メール審議を行い、承認を得る予定であることが説明された。

2. 2020年度事業案（事務局）

工藤理事長より、2020年度事業案が提示され承認された。事業案の内容は、1. 体育心理学専門領域学術/社会貢献企画（スポーツ心理学会との合同シンポジウム、2020横浜スポーツ学術会議企画等）、2. 総会、3. 理事会（2回）、4. 体育心理学専門領域会報第32号の発行、5. 2021・2022年度体育心理学専門領域役員選挙、6. 2020横浜スポーツ学術会議への若手研究者参加支援、7. 研究会/社会貢献活動支援、8. 体育心理学専門領域とスポーツ心理学会の統合に関する検討、9. その他、であった。

なお、本年度の総会は11月の日本スポーツ心理学会大会期間中に、第2回理事会は9月の横浜スポーツ学術会議の時期に開催予定であるが、新型コロナウイルスの状況によっては今後開催方法も含めて変更される可能性があることが説明された。また、研究会/社会貢献事業の募集は新型コロナウイルスによる社会状況の推移をみながら行うこと（7月以降）、横浜スポーツ学術会議への若手研究者参加支援は、大会開催に関する方針が決定した後（4月以降）で募集について検討することが確認された。

3. 2020年度予算案・補正予算案（事務局）【資料2】

工藤理事長より、2020年度補正予算案が提示された。横浜スポーツ学術会議の学術企画における外国人招聘の支出増額に伴い、特別会計予算の記念事業費用から20万円を引き出し、例年支出している20万円の記念事業積立をしないことで都合40万円の予算増額とすることが提案された。これに加え、支出の部では、会報のオンライン化に伴う会報関連費用の減額、研究会/社会貢献活動支援費の増額、

体育学会の代議員選挙が今回から web で実施されることにより本部から専門領域への補助金が配分されないことに伴う役員選挙実施費用の増額が提案された。また、会議費については理事会の web 開催に伴い繰り越しとなる可能性があることが説明された。以上のことについて審議され概ね承認された。このうち外国人招聘費用における支出配分に関しては、今後日本スポーツ心理学会との調整を行い、その結果をふまえて再検討した補正予算案を理事に送信の上メール審議を行うことが確認された。

4. 日本スポーツ心理学会第 47 回大会学会企画シンポジウムを体育心理学専門領域との合同企画とすることについて

杉山理事より、日本スポーツ心理学会第 47 回大会（2020 年 11 月 27 ～ 29 日、於：仙台大学）の学会企画シンポジウムを体育心理学専門領域との合同企画とすることについて提案され、承認された。企画内容およびシンポジスト選定については、日本スポーツ心理学会の研究企画情報委員会および体育心理学専門領域の企画委員会で今後検討を行うこと、またシンポジストへの謝礼は日本スポーツ心理学会と折半する予定であることが確認された。なお、体育心理学専門領域のみに所属している方は本合同シンポジウムおよび総会に無料で参加できることが確認された。

5. 2021・2022 年度役員選挙（事務局）

工藤理事長および國部理事より、2021・2022 年度役員選挙の実施方法および要項の記載内容について提案され、承認された。なお、今回から日本体育学会の代議員選挙が web 選挙システムで実施されるため、本専門領域の役員選挙と併せた形での発送や返送先指定ができない。これに関して、選挙管理委員会は専門領域事務局が担当し、返送先は専門領域事務局所在地である東京大学とすることが確認された。また、今後の専門領域役員選挙に関して web 選挙システムを導入することについて提案され、今後検討を行っていくことが確認された。

6. その他

関矢理事より、横浜スポーツ学術会議のアブストラクト査読の割り振り作業に関して工藤理事長へ依頼がなされた。

体育心理学専門領域と日本スポーツ心理学会の統合検討に関する今後の方向性について議論され、継続審議となった。

今年度から会報がオンライン化されることに伴い、会員に対してメールで冊子体送付の希望者を募ることが確認された。

以上

令和元年度決算報告

資料 1

令和元年度決算報告(自平成31年4月 至 令和2年3月)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	
収入の部				
当期収入合計(A)		1,438,083	1,355,589	82,494
前期繰越収支差額		617,683	617,683	0
収入合計(B)		2,055,766	1,973,272	82,494
支出の部				
当期支出合計(C)		1,835,000	1,627,455	207,545
次期繰越収支差額(B)-(C)		220,766	345,817	△125,051
支出合計		2,055,766	1,973,272	82,494

○収入の部

款	項目	予算	決算		備考
・前年度繰越金		617,683	617,683	0	
・年会費		1,294,000	1,212,000	82,000	2千円×606名(3月24日現在)
・郵便貯金(利息)		5	6	△1	
・体育学会専門領域補助金		144,078	143,583	495	
・令和元・2年度代議員選挙免送費		0	0	0	
○収入合計(B)		2,055,766	1,973,272	82,494	

○支出の部

款	項目	予算	決算		備考
・専門領域会報関連費用	小計	580,000	630,409	△50,409	第31号発行および第32号作成
	印刷費	240,000	285,120	△45,120	第31号
	会報送料	110,000	59,680	40,320	第31号
	原稿料	180,000	243,553	△63,553	第29-32号(47名)
	会報送付用封筒代	30,000	32,076	△2,076	第31号
	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	0	20,000	
・学会大会関連経費	小計	380,000	481,604	△101,604	第70回大会
	司会・演者謝礼	100,000	128,212	△28,212	
	会員外交通費補助	30,000	0	30,000	
	外国人招待	0	0	0	
	ランチョンセミナー代	150,000	281,312	△131,312	
	大学院生学会参加助成	100,000	71,080	28,920	
・研究会活動支援金	研究会活動の支援	100,000	60,432	39,568	第70回大会
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・令和元・2年度役員選挙実施費	郵送費、色紙代、文具等	0	0	0	
・事務局事務費	文具、コピー費、理事会弁当代等	50,000	2,000	48,000	
・会議費	理事会、委員会開催等費用	320,000	253,010	66,990	旅費交通費・弁当代等
・広報費	HPの管理・充実のための費用	200,000	0	200,000	
・通信費	会員・理事連絡費	5,000	0	5,000	
・当期支出合計(C)		1,835,000	1,627,455	207,545	
・予備費(B)-(C)		220,766	345,817	△125,051	
○支出合計		2,055,766	1,973,272	82,494	

△は超過

令和元年度特別会計決算報告(自平成31年4月 至 令和2年3月)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	
収入の部				
当期収入合計(A)	令和元年度記念事業積立金	200,000	200,000	0
郵便貯金(利息)		5	9	△4
前期繰越収支差額		1,000,012	1,000,014	△2
収入合計(B)		1,200,017	1,200,023	△6
支出の部				
当期支出合計(C)		0	0	0
次期繰越収支差額(B)-(C)		1,200,017	1,200,023	△6
支出合計		1,200,017	1,200,023	△6

*会員数昨年度662名から642名へと20名減(名譽会員17名含む、令和2年3月24日現在)

令和2年3月31日
この決算書は適正であることを認めます。

監事

木島孝文
田中美史



令和2年(2020年)度補正予算案

資料 2

令和2年度予算案(自 令和2年4月 至 令和3年3月)

○収入の部

款	項目	予算案	補正予算案	差額	備考
・前年度繰越金		220,766	346,037	△ 125,271	
・年度会費		1,254,000	1,250,000	4,000	2千円×625名
・郵便貯金(利息)		5	5	0	
・体育学会専門領域補助金		144,078	143,583	495	
・特別会計予算より		0	0		
・令和3・4年度代議員選挙発送費		78,720	0	78,720	
・当期収入合計(A)		1,476,803	1,393,588	83,215	
○収入合計(B)		1,697,569	1,739,625	△ 42,056	

○支出の部

款	項目	予算案	補正予算案	差額	備考
・専門領域会報関連費用	小計	520,000	350,000	170,000	第32号発行および第33号作成
	印刷費	240,000	120,000	120,000	
	会報送料	110,000	20,000	90,000	
	原稿料	120,000	180,000	△ 60,000	
	会報送付用封筒代	30,000	20,000	10,000	
・学会大会等関連経費	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	10,000	10,000	
	小計	220,000	330,000	△ 110,000	横浜スポーツ学術会議、合同シンポジウム
	司会・演者謝礼・会場費	100,000	100,000	0	
	会員外交通費補助	20,000	0	20,000	非会員・専門領域非会員対象
	横浜スポーツ学術会議	0	130,000	△ 130,000	
・研究会/社会貢献活動支援費	セミナー(プレ、ランチョン)費用	0	0	0	今年度セミナーなし
	大学院生参加助成	100,000	100,000	0	横浜スポーツ学術会議参加助成
・研究会/社会貢献活動支援費	研究会/社会貢献活動の支援	100,000	200,000	△ 100,000	
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・令和3・4年度役員選挙実施費	郵送料、色紙代、文具等	100,000	200,000	△ 100,000	
・事務局事務費	文具、コピー費等	50,000	2,000	48,000	
・会議費	理事会、委員会開催費用	320,000	320,000	0	旅費交通費・弁当代等
・広報費	HPの管理・充実のための費用	50,000	20,000	30,000	
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	5,000	0	5,000	
・当期支出合計(C)		1,565,000	1,622,000	△ 57,000	
・予備費(B)ー(C)		132,569	117,625	14,944	
○支出合計		1,697,569	1,739,625	△ 42,056	

△は超過

令和2年(2020年)度特別会計予算案(自 令和2年4月 至 令和3年3月)

○収入の部

款	項目	予算案	補正予算案	差額	備考
・前年度繰越金		1,200,017	1,200,023	△ 6	
・記念事業積立金		200,000	200,000	0	
・郵便貯金(利息)		7	7	0	
・当期収入合計(A)		200,007	200,007	0	
○収入合計(B)		1,400,024	1,400,030	△ 6	

○支出の部

款	年度	予算案	補正予算案	差額	備考
・記念事業費用		0	0	0	
・当期支出合計(C)		0	0	0	
・予備費(B)ー(C)		1,400,024	1,400,030	△ 6	
○支出合計		1,400,024	1,400,030	△ 6	

△は超過

編集後記

体育心理学専門領域会報第 32 号をお届けいたします。今回も、日本体育学会第 70 回大会関連の報告に加え、研究会の活動報告、研究室紹介、学位論文紹介、海外情報、そして事務局報告と、体育心理学専門領域に所属する会員の活動を俯瞰する内容となりました。

特に日本体育学会大会関連の報告では、レクチャーやシンポジウムでの学びを振り返ることができるのと同時に、新進気鋭の会員が傍聴記を寄稿してくれており、私たちに新たな視点や気づきをもたらしてくれています。大会を振り返りつつ、しばしリフレクションの時間を取ることで、次の研究課題への動機づけも高まるのではないのでしょうか。

この大会前後から編集作業が本格始動し、それぞれの先生方に原稿依頼を差し上げ、本日編集後記をまとめるに至りました。振り返れば、昨年 12 月以降、中国湖北省武漢市で新型コロナウイルス感染症の発生が報告されて以来、世界各地で感染が拡大し、3 月には WHO がパンデミックを宣言しました。わが国でも、安倍首相が全国の小・中・高等学校に臨時休校を要請し、4 月には全国に緊急事態宣言が発出されました。3 月の選抜高校野球、8 月のインターハイ等が次々と中止になる中、東京 2020 大会の延期も発表されました。スポーツが社会の平和と安寧の上にしか成り立たないことを、痛切に感じざるを得ない出来事となりました。同時に、体育・スポーツ心理学を専門とする私たちの研究活動も、新型コロナウイルス感染拡大予防を何より優先して考えざるを得ない状況へと変化しました。

編集後記にあたり、一言但し書きをさせていただきます。本会報をご覧いただければお気づきになると思いますが、シンポジウムの司会報告や傍聴記などでは、2020 年 7 月より東京 2020 大会が開催されることを前提に記載していただいたものがいくつかあります。これは大会延期が決定した 3 月後半にはすでに、執筆いただいた会員に対して原稿依頼がなされ、また原稿の提出が済んでいたことによります。広報委員会では、執筆いただいた会員に記載の修正を求めることはやめて、このような想定外の出来事も、私たちが体験した意味ある、重要な出来事として心に留めおくために、そのまま掲載することに致しました。読者の皆様には、この点ご理解いただけますと幸いです。

この会報を、次にひも解くときはいつでしょうか。その時には、この想定外の出来事を経た後に、私たちの研究活動が停滞することなく、むしろより加速化していることを願ってやみません。そのためには、私たち自身の生き方も、コロナ禍にあって、より健やかで、一層しなやかなものになっていることが求められるでしょう。

最後になりましたが、お忙しい中、この会報に原稿を寄稿、執筆していただいた先生方ならびに種々支援をいただいている事務局に対し、深く感謝いたします。

令和 2 年 7 月 12 日

広報委員会を代表して 土屋裕睦

日本体育学会体育心理学専門領域会報 第32号 (通巻第60号)

発行 令和2年8月7日 発行 (非売品)
発行責任者 工藤 和俊 (代表)
発行所 日本体育学会体育心理学専門領域事務局
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1
東京大学大学院総合文化研究科
TEL : 03-5454-6854 FAX : 03-5454-4317
E-mail : taiiku_shinri@idaten.c.u-tokyo.ac.jp
URL : [http://www.dexterity-lab.c.u-tokyo.ac.jp/
psychology_of_physical_education.html](http://www.dexterity-lab.c.u-tokyo.ac.jp/psychology_of_physical_education.html)

印刷 株式会社コームラ
